
彼女は僕に依存しすぎている。

U-Ton

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は僕に依存しすぎている。

【Nコード】

N4305U

【作者名】

U-Ton

【あらすじ】

月島瑠奈。15歳。文武両道。容姿端麗。極度の人間不信。武の方の才能は素晴らしく男3人程度なら相手にならない。新幹線が怖いからと同級生に先んじて徒歩で山口まで目指し始める。

医者まで匙を投げる。それが彼女。

そんな彼女が唯一信頼できる相手は“僕”のみだ。正直僕も彼女のこと好きだけど、僕しかいない中で僕を選ばれても嬉しくない。そんな僕達はある日異世界に呼ばれて……

………そうだよな。そんな僕達だもん。テンプレにはいかなよな。

（ 7月2日 ある人の助言でタイトルを“彼女にとって僕は例外らしいのだが……？”から変えました。）
1月より第2水曜と第4水曜の16時更新に変更させていただき
ます。

0・英雄達の軌跡？

6つに別れた生き物を統治する世界の神は不服だった。

1人は欲を用いて互いに牽制しあうことにより

1人は1人1人に力を与えることにより

1人は何にも自我を与えないことにより

1人は罪を裁き、苦しめることにより

1人は善人を集めることにより

1人は傍観することにより

自らの世界を望む方向へと動かそうと試みた。

しかし、現実はそのままで緩くはない。

誰もかれもが理想とは違う現実に打ちのめされる事となる。

彼らは善良であつた。だが、同時に彼らは自分の過ちを認めなかった。

その頑なな態度は、やがて有を無と変え、終いには何を変革しようとも思わなくなった。

だから、その計画に神の大半が賛成した。誰も己の失敗を棚に上げ、自らの目指す桃源郷を掲げた。

すなわち、愛が遍く大地に広がり、万民が皆を想い合う。

誰もがお互いを憎まず、ただ動物としてぶつかり合う。

そんな曖昧な机上の空論を叩きだし。再び過つ可能性など考えず。
あやま

世界はそのために動き出した。

『英雄伝——1章 神々の思惑』ルーナ・フ
アンテーク・セード著より一部割愛

1・朝、起きたら横にいた（前書き）

どうも。ニックネームをつけるのも面倒なんで、兄の名を借りて投稿します。処女作です。

王道が好きですが全力で逆走しているといつも突っ込まれます。拙作ですがゆるゆると続けていきたい、思っているのでよろしくお願いします。

1・朝、起きたら横にいた

朝、気が付くと隣に無防備に青色の男物の寝間着を着こなしている奴がいた。

……微笑みながら見下ろしていた。

更に言うなら同じベッドで片腕について寝転がっていた。

更々の長い金髪と外国人特有の彫りの深い整ったお顔。目は青くどこまでも澄んでいる。惜しみ無く均整のとれた瑞々しい女子高生の肢体をさらしている。

美人というには多少童顔なのが気になる所だが、美少女と言つぶんには文句なしだ。

口許には微笑ましいような物を見るような笑みが。

何か圧迫を頬に感じ、そのまま横目で見てみると奴の人差し指がのめり込んでいた。

「……くふっ」

少し声をたてて、奴は笑う。

一瞬氣をとられる、太陽の笑みが零れる。

「……っ」

少し頬を赤くしながら目を反らす。

「親友君はかぁ～いいなあ。はふう～」

「吐息がかかるからやめろ」

「いっじゃん。さっき歯を磨いたばかりの爽やかため息だっ」

そう言いはふはふ息をたけてくる奴。確かにキシリトールの臭いが

する。

というか休日の朝からこのテンションにはついていけない。時計を見ると6時25分。学校がある日でも二度寝ができる時間である。

目を瞑る。朝はとにかく（ρ・・）なのだ。しかし、そんな朝の営みも隣の奴のツンツン攻撃によって阻まれる。

（――#）

「何をしゃがる」

「今朝は寝かさんぞ！」

「夜だったら嬉しいけどね、朝は勘弁」

……誤解無きようにしておくと僕はまだ生息子です。（ノー>。）

「じゃあ、今夜は寝かさない」

「うん。勘弁」

「嬉しいんじゃないのかっ?！」

「嬉しいだけ」

少し下ネタを交えた会話。ピロートークとか言っただっただけ?（

注：違います）

朝だと言っのに目が完全に覚めてしまった。仕方なくベッドから出る。奴も出る。

そして、伸びをして、大きな鞆が2つ部屋の隅にあるのが目についた。

「この鞆は?」

「修学旅行の準備だよ、親友君」

（・・）ゞ

現在高校2年生の春。僕も奴も最後の学校行事のお泊まりだ。確か10日後に山口辺りに行くことになっているはずだ。タンスを開けそこに一式しか洋服がないことに気付く。

……（?―?）

それどころか、他の洋服どころか下着、靴下におけるまで1式しかない。

慌てて部屋中を探し回ると、奴が後ろから声をかけてくる。

「いいか、親友君」

「……なんだ？」

（・ω・;）（;・ω・）

手を休まず調べたところを何度も調べる。当然ない。

ベッドの下。健全な男子高校生の証と大抵の奴が言いやがる参考書が一冊出てきただけ。

部活ようの小道具として買った、それには“見本”とかかれたシールが貼ってある。奴はそれを手にチラチラ拝見しながら僕に言う。

「私は自分しか信用していない」

「うわ、ヒデエ。僕は信用していないのか？」

「いや、自然と親友君にだけは裏切られても構わないと思っている」

「それはそれは」

（ 〇 ； ）スゲエ。信頼はないけど。僕は災厄か。

「そんな訳で新幹線などという兵器も信頼していないわけだ」

「兵器じゃねえだろ」

「人を殺せるぞ？」

「それ目的では作られていないだろう?」

教科書の間に挟んだとか……プリントじゃないしな。後は洗濯されているとか……誰が何のためにだよ。

(、ω、＃)……さて、そろそろ目の前の奴に吐いて貰おうか。

「まあ、そんなわけだ」

「僕の服はどうした」

「最後まで話は聞け」

「……………どうぞ」

「今日から山口県へ向かってGOだ」

(・ω・)g

ああ、成る程。それで新幹線は信頼出来ない、って話に繋がるのね。で、僕の服はどうした。

大体の予想がついてしまったので、2つある鞆のうち片方を開けてみる。

僕のトランク스가いきなり5枚程、視認できた。

「あ、そちらは私のだ」

w(o)w

遅れてくる奴の声。いや、待て。

もう一方の方も開けてみる。

僕のトランク스가いきなり5枚程、視認できた。

^| ^;

……誰か状況を説明してくれ。

「私の服はないからな」

「自分の家にあるでしょ?!」

「私の服に何か私の家族がよからぬものを付けているかもしれない」
「いつも着てない?!」

「ここに来るときは親友君の体操服を借りて来ている」

(;, D,) 怖いヨ。恐怖だよ。

まあ、こいつが変なのはいつものことなので、今はもう一つの方を指摘するに留める。

「で、今から山口県に向かうって?」

「うにゃ」

「……歩いて?」

「当然」

………………。 (. . .)

「行つてらっしゃい」

「うん。行ってくるね」

そう言い、両方の荷物を持つ奴。流石にそれは困る。 (. o . ;)

奴の片方の荷物を取り上げる。

すると奴は最大限の笑みを浮かべ、上目遣いに僕を見てくる。

「ふっふん〜」親友君はやっぱ優しいな〜」

「……何がだよ」

「何だかんだ言いながら付き合ってくれる」

(* . . *)

ヤラレタ。卑怯だ。

そんな姿を見せられたら、僕に抵抗する余地がないじゃないか。
クルクル回転しながらのたまう奴はただ可愛くて、

「……仕方ないなあ」

(- o -)

嘆息とともに山口県までの旅費と日程を計算し始めるのであった。

1・朝、起きたら横にいた（後書き）

……エロコメに分類されるのでしょうか、これ。
次回は三日後の予定です。

2・僕理由はこんなところ(前書き)

顔文字小説第2弾!!! 気に入っていただければ幸いです

2・僕理由はこんなこと

月島瑠奈は僕の親友以上恋人未満の親友である。

それと同時に重度の精神疾患——対人恐怖症をもつ一人の女の子である。

この子は家族に対しても心を開けないし、医師ですら手を焼いている。

そんな彼女がなんで僕にだけ心を開いているのかは本人達にもわからない。

中学二年生の春休みにひょんなことから出会い、色々な偶然や故意に起こされた事故を飛び越え、中学3年生くらいの時命を救ってから、今のように信頼してくれるようになった。

容姿はあの頃も今も変わらず端麗で、性格や僕に関わる物以外に対する行動も大体変わらない。

そして、彼女の対人恐怖症対策の一環として僕は彼女の側にいることが半ば義務付けられている。

(pー;))

なにはともあれそういうわけで今日は山中でキャンプである。

火を使ってもいいようにキャンプ場を探しだし、頼み込んで入っている。

今の内に明日の宿も探さなくてはならない。

携帯電話は当然圏外を示しているのでGPSを使えずに地図を見る。

今日進んだ距離を確認。明日は大体……

因みに僕がそんなことをしている横で奴は何をしているか、と言うと

「~~~~~」

僕の寝巻きを着て寝袋に転がりながらゴロゴロと遊んでいた。

(ノ・o・ノ)

「遊ぶな！」

「遊んでなーい」

「じゃあ、何をしている」

「親友君を待っている」

(-.-.) g

成る程。手伝う気は更々ないらしい。

暫くすると奴はゴロゴロ寝っ転がるのにも飽きたのか、自分の鞆（僕の私物しか入っていない）から一冊の本を取り出す。

「さて、親友君の好みをリサーチする」

..... (・|・)

「理由と利点を言ってみろ」

「私が親友君の好みかを知りたいから。あと、利点は親友君の好みのプレイを知れるから？」

..... (・o・)

..... いや。部活の備品として買ったものにそこまでの思い入れはないんだけど。

「それより、親友君」

「なんだ？」

「このエロ本は私と同じような女性ばかりが描かれていないか？」

「..... 他意はない」

うん。僕はエロ本選びに付き合ってくれた2人の悪友を思い出す。

大人の階段を登る気が、とか、彼女に見られても大丈夫のように金髪巨乳系にしておくぞ、とかニヤニヤしながら言われた。

「そっか、そっか」

「納得するな」

「嬉しいぞ。私は親友君の好みなのか」

「……好きなのは否定せん」

うん、多分一人の女性として、ね。
だけれども、だからこそ

「2年間夜中に一緒に寝てもピクリとも手を出さないから心配したぞ」

「むしろこの場合は手を出したあとのことを心配してくれ」

「ん？デキ婚は嫌だと？」

「結婚することが前提？」

そう返すと彼女は本を林に放り出し、寂しそうに空を見上げる。

「私には親友君しかないからな」

「……………」

「勿論、親友君が嫌ならいいんだ。私は親友君を失うのが怖いし、自分からは何も出来ない」

「……………」

「ただ私も女の子だからな、純白のウェディングドレスには興味があるだけのことだ」

(´・ω・｀)

僕も地図をおき、星空を見上げる。だから、踏み込もうと思えないんだ。

彼女は他人のことを元々信頼していない。唯一の例外が僕。それを利用して、壊すことも、独占することもできる。

本能的なことを言ってしまうえば、襲ってしまいたいし、彼女のことを穢したい。

手を握りたいし、抱きしめたい。愛を語りたいし、キスもしたい。ただ、僕はとてつもなく怖い。人の恋の行方などは誰も知れないのだから。

結果として、踏み込んだ結果がもしかしたら再起不能なまでに彼女をペチャンコにし――

何より彼女が二度と華のように笑えなくなるかもしれないのが嫌だ。不意に体が後ろに倒れこもつとする。

「親友君」

(＊・―・＊)

いつの間にか押し倒されていた。キャンプファイア用に土がむき出しになっている広場に。

「私は君の側にいていいのか？」

真剣に蒼い澄んだ瞳で覗きこんでくる。

正直な話、愚問だ。

そして、それを伝える方法はいくらでもあるし、伝えたいことも色々ある。

僕は優しく右手に彼女の左手を取り、左手を彼女の頭の後ろへ。

少しビクリ、と反応した彼女をクルリ、と回転させて体勢を反対に。そして瞳を覗き込む。

「僕は側にいて欲しい」

奴は頬を赤くしてそっぽを向く。目は此方を向いていた。

「わ、私の質問の答えになっていないぞ」

「そうかな？」

「ああ。私は権利があるのかを尋ねただけだ。け、決して親友君の希望を聞いたわけじゃ……」

(・ω・)

につこり、と擬音がつくような笑みを張り付かせる。

誤解無きように言えば、自然になってしまっただけだ。

奴は益々赤くなりついには目まで反らし始めた。チラチラ此方を見てはいるけどね。ゴクリ、と——どちらかはわからない、もしらしたら両方からかもしれない——音が鳴る。

「僕は君に対して持つ権利は希望をきかせることくらいだよ」

右手を放し左手を優しく抜く。ぱっぱっ、と誇りを払い、手をさしのべる。

何故かボーと何かを思い出すようにしていた彼女だが、両頬を叩くと僕の手を掴んで立ち上がった。

それからお互いに無言でお互いの寝袋に入る。

「……女としては拘束の一つや二つして欲しかったな」

「……すまん」

「な、何のことだっ？」

「さあね？とにかくお休み」

「お、おやすみなさいっ！」

照明代わりの懐中電灯を消して寝袋に入る。野生の動物対策はここにくるまでにしてあるので、命の不安はない。

が、お互いに寝付きの悪い夜になりそうだった。

2・僕理由はこんなところ(後書き)

次は三日後の16時を予定しています

3・朝、起きたらいなかった

朝、目覚めるとわけのわからない（・ω・；）（；・ω・）な状況になっていた。とにかく、覚醒した後目に入ってきた状況を逐一報告していかうかと思う。

まず、見たのは隣だ。

複雑かつ怪奇（意味不明という同義語もある）な事情で閨をとともにしている僕達（寝ていられるのは信頼できる人の前だけらしく、それ以外の時は森で野宿していたらしい）の朝は奴が僕に何らかの攻撃をしかけることから始まる。

しかし、今日はそんな事実はなくただ大理石つばい壁が見える。可笑しいな、昨日は森で寝たはずなのに、なんて考える。

……………つて？

奴がいらないっ？！

周りを見渡しても高級な家具があるだけで奴の姿はない。

いつの間にか僕の寝袋はベッドへとクラスチェンジしていたけれど、どうでもいい。

奴はっ？！、（・―・；）ノ

取り乱し半身をベッドから起こす。

「残念だね。君は選ばれてしまったみたいだ」

その視界に男の姿が目に入る。歳は20代前半くらい。黒髪黒目の東洋人と同じ肌。鋭利な刃物みたいに肉体は研ぎ澄まされている。

「状況を説明して頂けませんか？」

「簡単だよ。君は選ばれた。それだけさ」

「何にですか？」

「この国を救う異世界から来た勇者様として」

……えーと。ネット小説？（^ー^；）
思わず失礼なことを思ってしまったが、混乱するのは無理の無いことだと思う。

とりあえず、ベッドから身体を起こして立ち上がる。

「元の世界に帰してください」

「いいよ、その鏡に入れば帰れるから」

「帰れるんですか、それっ？！」

「うん。帰ってくることはできないけどね」

（。d。；；；）。

王道を打ち破っていやがるぜ。

トコトコと鏡に近付いて手を翳してみると普通に入った。

……」（・ゝ・；）「」

期待はずれも甚だしい。現実味がないのに比例してo（^o^）o
感も無くなっていく。

扉の方を見ると笑いながら手を振っている男。なんか癪だ。

「本当に帰っちゃっていいんですか？」

「うん。ぶっちゃけ君祭り上げられているだけだから」

「それは知りたくなかった！てか言うなっ！」

「じゃあ、逆に聞くが」

男はそう言って一回咳払いをする。そして続けた。

「お前は自分に勇者の資格があると思っているのか」

………（、・ω・、）

ない、ですよね！。

どうせ顔も勉強も運動神経も中の上から中の下で安定しておりますよ。

でもね、こんな僕でも夢くらいは見るのですよ。

自分では気付けていない、他人よりも抜きん出たところを教えて欲しかったのですよ。

部屋の隅でいじけていると、いつの間にか扉の前にいた男は居なくなっていた。

「……………一応、誰かに断りを入れてから帰るか」

（…）

時というものは流動的であつ一定の速度で進み続けるものだ。そのことは、よく消極的な判断を後悔するという意味で思い知らされ、打ちのめされる。

だが、この時の消極的とも言えるこの判断程、後に感謝できたものはない。

3 朝、起きたらいなかった（後書き）

次は三日後を予定しています

4・とことん常識は通じない(前書き)

王道から外れていく……誰か羅針盤を!!

4・とことん常識は通じない

大理石、ぼい白い石柱に荘厳な王座へと続く赤いカーペット。それより何故赤いカーペットが定番何だろうな？

高価な色というのはわかるけど、鮮血の色に似ているし。王座にくたためにはそれだけの血を流させることが必要だという必要悪の象徴だろうか。

そこに控えるは多くの従者と奴隷。王の趣味なのかは知らないが全員女。それで従者はメイド服で奴隷は首に首輪をつけている。

王様は若い。顔は整い、背は見たところ低くない。髪は地毛なのかは知らんが赤い短髪で中々筋肉質である。

まあ……そんなわけで

現在、僕はアールピージーで言うところの王の間みたいなところに膝まづいている。

m (——) m

非常に不本意だ。

「そなたが勇者か」

「らしいです」

「では、頼んだぞ」

「嫌です」

「地図を渡せ」

(・ω・・)

弱った。どうやら王様は頭の弱いお人らしい。最低限の意志疎通すら図れていない。

従者の一人、一番王の近くに控えていた少女に地図を押しつけられる。

容姿の説明はしだしたらきりがないので省略。

「いや、ですから」

「勇者殿しゅっぱーっ」

『お気をつけてー!』

「行かねえよ!人の話聞け!」

(-へ-#)

いや、ね。もう不敬罪とかどうでもいいや。まばらな拍手が響き渡る中僕は怒り立ち上がる。

王様をみると視線は僕の方を向いてなかった。

侍女の方を向いていた。正確に言えばその……………口に出しているのが憚れるような方に向いていた。

僕のジト目に気が付いたのか王はコホン、と咳払い。

「詳しいことは地図に書いてある」

「書いてあれば言いというものではないでしょ」

「討伐をしてきたら好きな女をやるう」

「そういう問題でもないし、僕の心はあいつに決まっている」

王様は鬱陶しそうに首を振り、ジェスチャーでシッシと僕を追い払う。

「とにかく行ってこい」

「理由がない。てか帰らせろ」

「鏡から帰れるからご自由に」

……………(ノ・o・ノ)

強烈な違和感。かつて王にここまでぞんざいに扱われた勇者がいたであろうか。

いや、違う。この違和感を感じる大本は……

「あなた方は何故僕を勇者と呼ぶ」

(・―・)

異世界から来た、その特異性と希少性は認める。崇める、奉る、招く。それらの行為ですら少し不思議ではあるが、まだ理解はできる。しかし、だ。いくらなんでも呼んでおいて、この態度。まるで、望まれていなかった召喚みたいだ。そのくせ、呼称のみは救世主の名。何もかもが可笑し過ぎる。

「……………」

「……………」

『……………』

沈黙が場を支配する。王と僕の視線が交差する。

誰も、何も、言わない。

埒が開かない。そう感じた僕は揺さぶりをかけてみる。

「……………帰らせていただきます」

「勇者殿おかえりー！」

『さようならー。お元気でー！』

(・―・)

トコトコと鏡の前に行き左手を差し出しても何の止めも入らない。それどころか、手を抜いて王の方を見ると鬱陶しそうに舌打ちまでしてきやがる。

……………段々よめてきた。

頭の中で状況を整理してみる。

まず、僕という個人には用がない。

いや、魔王を討伐させようとしてはいる。が、基本的には上からで頼む態度ではない。

その上この世界の礼儀作法に詳しくはないが、まさかこれが最高儀礼なわけがない。

役職があるのは王のみ。あとは侍従はともかく、奴隷。官吏がどちらかの格好を儀式服として使っている事でもない限りは……とにかく、全てにおいて突っ込める程、怪しすぎるのだ。

「とはいえ」

(- . -)

正直に申しあげてしまえば、この世界の危機とか別にどうでもいい。今の感情は勝手にやって勝手に滅びやがれ、僕を巻き込むな程度のものだ。

面倒な事になる前にさっさと帰るか、そう思って改めて鏡の前に立つ。

「……………っ?!」

(。 ｵ 。)

一瞬何かがよぎる。第6感というやつに近いかもしれない。

召喚されたのに必要とされず、利用しようとはしたが、初めから帰る方法まで示され、あまつさえ帰れとまで言われる。

だが、もし仮定が間違っていたとしたら？

僕が必要とされていないのに召喚された、もしくは僕は必要なかったとしたら？

例えば、服。これは現実世界にいた時、寝間着として使っていた、

あの夜着ていたものだ。

背筋がゾクリ、とする。

例えば寝袋。僕とともに召喚されたのではないだろうか？

「王様」

「そちは何だ！帰るなら帰る！魔王を討伐しに行くならしに行くで早く……」

「寝袋を返して頂けませんか？少し魔王に用事ができたので」

「ね、寝袋だと？いや、魔王を討伐しに行くのか？」

「ええ。お任せを。ところで、一緒に召喚されていませでしたか？」

王は近くに控えている侍女の1人になにやら話し掛ける。僕は不安と怒り、そして何より焦りを感じながらそれを待つ。

今、僕が出した結論はあまりにも失礼極まりないものである。それこそ、外れていたら魔王討伐を引き受けるべきな程。

だが、もし、万が一当たっていたら……

「お待たせしました」

侍従が僕に寝袋を手渡す。

恭しく礼をして、物を確認。

——……………くそっ！

手を見るとそこには寝袋が——二つの寝袋があった。

それは奇しくも——必然としか考えられないが——前日僕らが寝た寝袋に色や形がそっくりであった。

4 ・とことん常識は通じない（後書き）

次も三日後を予定しています。

5・馬鹿が馬脚を現した

異世界召喚。それはネット小説ではよく世界の救世主を呼ぶために行われる。

普通に巻き込まれて異世界に定住する人もいれば転生なんかもしちゃう人もいる。

職業も英雄から貴族の下僕まで様々だ。

だが、それらはあくまでもある程度の善意もしくは公平なる神の意志で喚ばれた人達の話ではない。

女性の特にだ。

これは仮定の話でしかないが、もし、召喚システムなどというものが確立されていて。

もし、呼び出す対象の指定がある程度出来て。

もし、倫理観や人間的節操などに欠けている権力者がいたらどうなるか。

想像にお任せせざる負えないが、そういうことが起こる可能性もなきにしもあらずだろう。

召喚システムが私利私欲を満たす。その目的のためだけに使われることも。

僕は霞もなく胸が露になり手足をベッドに縛られた妙年の美女から目を反らす。

「なかなか胸が……」

「はあ……」

つていうか、バレバレなんだよ無能王！

縛り上げられ、自由を無くされた自分の後宮の住人を見せ、堂々と勇者に自慢し始める王。

しかも、自慢するところは性的なところ、もしくは顔や髪。

やった感想等、僕はどう返していいものか……

そんな性狂王の後についてヘエヘエ、媚を売る勇者。

世界は最高に狂ってやがるぜ。

「どうだ？羨ましいだろ！」

興奮した様子で息巻く強隈王。

「そうですねー」

殺したい程にね。

普通だったらずでに殴りかかっているよ。

いや、他の人がいなければ。

しかし、今僕には奴の居場所を見つけるといふ使命がある。

とりあえず心が籠っていないようにはギリギリ見えない程度の声で返す。

あの後、おだてにおだて機嫌を良くさせた後、この世界にはいい女がいない的なことをちらつと言ってみた。

すると、そんなことはない、我が妻は云々かんぬん言い出したので、つれない返事を返しておく。

まあ、その後も何だかんだ言い合って、馬鹿にしまくったら、ム力ついたのかこのプレイルームに連れてこられたのだ。

やはり馬鹿なのかそれを聞いて更に機嫌がよくなる王。

「どうだ？これならそなたも」

「ですが、若さにかけますね」

「若さに、とは？」

「初々しさにかけるんです」

「な、なんと？それはどういう……？」

かつ、と目を見開き教えを乞う王。

それはまるで世界の命運を決める戦の作戦会議のように。流れる緊迫感に溢れる隠語。

……王と勇者の猥談、ってどこの層に需要があるんだよ。

僕は自分の像がドンドン崩れ落ちていくのを感じながら答える。

「確かにこのものはどのような無茶な体勢にも耐えてくれる包容力があるでしょう」

「それがいいのでは？」

「いいえ。この者にはあの甘酸っぱい初めての味が出せない」

「わ……私はやはり初心を忘れていたというのか」

(´・o・｀)

アホもここまでいくと憐れに思えてくるから不思議だ。

というか、経験ないのにハツタリをきかせまくる自分もどうなんだ。そうして何だかんだで最後の部屋にたどり着く。

「そして、ここの部屋が最後の部屋。今日召喚されたばかりの生娘達だ！」

馬鹿だー！

この王様、馬鹿だー！

しかも、その馬鹿さのおかげで大ピンチ。

当然僕が何かしら気付いた「脅威になりうると判断した従者の方々」が後ろで剣を抜き出した。

ここは自分が馬鹿で気付いていないと最大限のアピールをしてかわさなくては……！

「そうですかー。僕とともに召喚されるなんてそんなこともあるんですねー」

「しかし、一年も待ったのに今年は5人しか至宝の美少女がいなくてのう」

o r z

剣を出し後ろから僕を牽制する気配。

頼む。頼むから。

王。その話はもういいから。

「それは残念でしたね」

「しかも、面倒くさいのだ。奴隷や侍従と違い、この世界では婚儀を行ってからではないと……」

話が勝手に逸れてくれる。

まあ、おかげで猶予が後3日あることはわかったが。

この王様と世界、少々使い勝手が良すぎないか？

「では勇者殿だけにお見せしよう」

「よろしいのですか？」

「なーに。私もまだじっくり視か……もとい見ていないのだ」

何を言いかげやった、この最低王。

しかし、話が早めに逸れてくれたおかげでまだバレてないと判断され、剣が収められたのも事実。

感謝と下げずみはしておこう。

5・馬鹿が馬脚を現した（後書き）

次からも二日後……遅くてすみません

6・作戦は開始される

扉が開かれる。どうやら、外からしか開かない仕組みらしい。部屋は明るい。

薄い赤色のカーペットが敷かれ、こちらから見て窓側に向かって横向きに5つ置かれている

窓には脱走対策用の鉄格子がかけられており、部屋の中には5人の美少女が。顔は見えないが多分そうだろう。

ベッドに泣き崩れている茶髪。

それを慰めるようにしながら自分もおろおろと辺りを見渡している黒髪。

つまらなそうな、人生を諦めたかのようにただ虚空を眺めている青髪。

果敢にこちらに向かって椅子を向ける半泣きの赤髪。

そして、部屋の隅に座り油断なく構えている孤高の奴。

……よかった。

その少女達はまだ縛られていなかった。

服もまだ完璧に着せられていた。

奴はこちらを見て、やっぱり、というように微笑んだ。

因みに隣の王はゲテテと嫌らしい笑いをしながら下女の一人を従えトイレに向かった。

下品だし、下女には同情もする。だが、暁幸だ。

奴だけでなく、出来れば全員を助きたいからな。勿論いざというときのために、優先順位を好みの順につけておくのを忘れない。

それでも、依然として部屋には15人の敵がいる。

——今、下手に動くのは愚策か……

だとしたらせめて脱走させるための布石を打とう。さあ、ミッシェン開始だ！！

(ω)

僕はにつこりとして、その内の一人に話し掛ける。

「あの女達も縛るのですよね？」

「ええ。それが何か？」

「僕に任せてもらって宜しいですか？」

「構いせんが？確認はさせて貰いますよ？」

「ええ、構いせん」

そう言つて2種類の糸をとつてきてもらう。

長いロープと薄い紐だ。王は帰つて来ないが、楽しんでいるのだろう。

連れていかれた一人には悪いがその時間は有効に活用させてもらう。とりあえず、まずは難易度が一番低そうな青髪。ショートカットにパツチリとした二重瞼が特徴的。身長は低く胸も小さいが、それはそれで需要がありそうだ。

年齢は……そうだな僕と一緒にくらいか？

「うーか、その事で王が見逃してくれるかな、と一瞬思ったがあの変態王だ。」

なんかさつき貧乳についても熱く語っていたし、それはないだろう。尚、召喚されただけのことはあつて絶世の美少女。

この子は脱出のチャンスがあつてもこんな感じだろう。正直、自分で動いてくれれば幸いだが。

「……………」

「……すまん。少し堪えてくれ」

両手を広げさせて、胸を強調するような格好にした後、ベッドの下で靴紐を結ぶときに使う蝶結びをする。そして、足、自殺しないように指示されて口にも。その後、布団を被せる。
次は……………

「親友君。私にもしてくれ」

(´・ω・｀)

金髪の美少女が近付いて来て何を囁くのかと思ったら、変態願望だった。

少し抵抗してきた黒髪にあることをコッソリ耳打ちした後、妙に抵抗の無くなったその子を一番窓側のベッドに運び、同じように縛っている最中だった。

口パクで意志を疎通。

ていうか、君本当にやられたいの？その後、王の餌食になるよ？

「いや、親友君に縛られてみたいだけだが？」

……………さいですか。

まあ、縛りたくないわけではないのだが、今は他にやって貰う事がある。

目でコンタクト。そして、ある作業と実験が終わったところで僕は奴に投げ飛ばされる。

背中に鈍い痛みが走り、窓に叩きつけられる。手からは薄い紐を巻いていた糸巻きがが自然に鉄格子をすりぬけ、窓の外から投げ出される。

チラリ、と横目で窓の外を確認。森だ。

どうやら城壁から飛び出した部屋らしい。運がいいな。

……ん？そんな事をしているのかって？不審に思われないのかって？

心配は無用。だって他の人は奴に目がそれているから。

奴は暴れていた。相当手加減をしながら。奴の力なら素手の5人程度であつたら倒せるだろうけど、此処には武装をした侍従が15人もいる。

奴の本当の力が知られ、警戒されても困る。だから、引き付けられる程度に暴れてもらっている。

赤髪と茶髪もそれを見て加わったが、数には勝てず、間もなく取り押さえられる。

その間に、黒髪のベッドに布団をかけてやる。

「勇者様。暴れるといけないので、後はこちらで引き受けましても？」

「……ああ。頼む」

問うてきた侍従に返す。

すると、怪訝そうに眉をひそめられた。

「あそこの金色の女は知り合いでは？」

こういう時に一番やってはいけないことは下手に嘘をつくことだ。かといって、答え方によつては命に関わる可能性がある。だから、ギリギリの線で返す。

「何故そう思うのですか？」

「いえ……何となくですが」

……そうに決まっているだろう。

まだ確かなことはわからないが、多分今回呼び出されたのは奴だ。
僕はおそらく巻き込まれただけ。

「そんなことはありませんよ。ちょっと昨日、強^{レイブ}隈しようとした女に似ていますが」

そんな僕は勇者様。……一応、嘘^{ウソ}だけど。

ノータイムでこう返すことによって自分という人間の評価を貶める。

だが、それと同時に自分が奴と知り合いで逃がそうしている、という疑いを晴らす。

更に倫理観において欠如していることをアピールするのも忘れない。

……実際のところ、奴1人なら放っておけばいいんだけどな。もしくは奴と話せたらもつと楽なのに

え？奴以外を放っておく？君ならそんなことはできる？少なくとも僕は、人間には命をかけるだけの価値はあると思うんだ。

僕の正義が、風紀部の部長としての使命感が騒ぐ。

今、これだけの仕組みを気付かれず、僕が生きていること自体が幸運すぎる。

これは、神も応援してくれていると考えていいな。

聞いてきた侍従さんにも納得してもらえたみたいだ。白い眼が痛すぎる。……嘘^{ウソ}な事を告白したいけど、ここは我慢。

その後、全員に白い眼で見られながら2枚の金貨と5枚程の銀貨を渡され城を出た。

6 ・作戦は開始される（後書き）

次も三日後。でももうすぐ一週間周期にさせていただきます……
すみません。言い訳ですが、まだ学生なんです。

7・能無し勇者と廃位された王子（前書き）

いやゝ暑いですねえ……

そんなわけで7話目です

楽しんでいただけたら幸いです。

7・能無し勇者と廃位された王子

王様は最後まで戻って来なかった。

まあ。なんだ、ほら、お楽しみなんだろう。

そう思うと一刻も早く、あの穢らわしい場所から奴を救出したい。そんなわけで物凄く白い眼で見送られて、城下町へと続く橋を渡り、念のため城門が見えなくなるところまで歩き、そこから横道にそれて……

「よう、勇者」

森に向かおう。そう歩き出したところで今朝会った男と遭遇する。白い浴衣っぽい服を着て、いボサボサの髪を左手で掻きながら、剥き身の安っぱそうな剣をこちらに向けている。

「どこまでわかっているんだ？」

僕は極力笑顔を向けながら返す。

「わかる？何のことでしょうか？」

すると、男はニヤリ、と更に強い笑みを浮かべる。背筋がゾクリ、と凍る。

逃げなければならぬ。何故だかそんな感じがする。

そこで、気付く。体が動かない。

まわりつくように何かが体に巻き付き、僕の動きを遮ってくる。

男はゆっくりと動く。

剣が右側に持っていていかれ右肩の上におろされる。

「面倒なことは無しだ。俺は君に聞いた。だから、君は答える」

簡単なことだろう、そう楽しそうに彼は笑う。

汗は流れる。眼は閉じられない。

気が抜けると威圧感に吞まれてしまいそうだ。

殺される。

恐怖のあまり心臓がドクン、と波打つ。

ごめん瑠奈。僕は結局一度も君に想いを告げられないまま……

「……はっ」

何故か体中から力が溢れるような感触に襲われる。

活気が戻ってくる。

肩の剣を後ろに跳びすさつて範囲から外れ、構える。

闘うためではなく、逃げられるように。

「ほう？お前はどんな能力を持っているんだ？」

「能力？何のことだ？」

「しかも、そんな偶然か。いやはや……」

面白い。彼はそう言うのと剣を捨て、こちらに手を伸ばす。手を開き、

ただ、握手を求めてくる。

(・ω・；)

え……………

突然の行為に驚き、僕は反射的に手を握り返してしまう。

ゴツゴツとした感触。伝わる重い質感。

物語にはたまにでてくるけど、こういういきなり過ぎる展開を構成するキャラクターはやめて欲しい、と切に思う。

「俺はこの国の元第5王子。世間からは不能王子と呼ばれている」

突っ込みどころは多分にあるのだけれど、なんか今この人凄いことを……

……………（。A。；；）

ええっ?!王子様ですか!“元”とついているところを見ると廃位されたみたいだけれど。

そうなるど権力争い、とかそゝいうのに手を貸せ、って要求とかしてくるのが普通だよな?

(-.-)

できれば、関わり合いになりたくね。

「勇者よ。俺はこの国を理想の国にしたいんだ。そのために協力してくれ」

ほらね、そうらきた。僕は逃げる構えを崩さない。相手がしゃべり終わってすぐに断る。

それを相手が理解するために要する一瞬の間を利用して走りだそう。相手は今手を放し、頭を下げた。逃げるのには好都合だ。

「人の自由がないのが憎い。人が物のように扱われるのが嫌だ。そのためには命すら投げ出してもいい」

スタート準備は完了、体調は万全。さあ、力の限りに……………?

……………って、はあ?!

今、この人なんて言った?

完全に力が抜けていつてしまう。あまりの王子らしからぬ(当然イメージ)発言に思考がフリーズ。二の句が告げられない。

さっきからこんなばかりだが、勘弁して欲しい。

だって、仮にも元王子って、あの王の兄弟、もしくは息子だぜ？

所詮はあの王と同じ穴のむじな。性の奴隷。インキュバス
淫魔。

権力だよ、金だよ、女だよ、って俺さえよければいい主義、みたいな感じに思うのは当然じゃないか？

「勿論、俺が権力をとるために嘘をついている可能性もあるだろう。だから――」

王子はドッシリと胡座をかいて地面に座る。そして、和服みたいに重ね合わせて着るタイプの服を腹まではだけさせて、何処から出したのか短剣を添える。

所謂、THE・切腹の格好。

ああ、初めてあの服を見た時、何かに似ていると思ったら白装束じやん。

「俺の命と引き換えにこの人を、この世界の人間を、救ってくれないか？」

そう言つと逆手にもつた短剣で己を突き刺す構えをする。

「とりあえず、待ってください」

僕は混乱する頭を振りながら、とりあえず相手の手を取り、腹に突き刺さるうと動くブツを止める。

えーと次は………

(・ω・;) (;・ω・) オロオロ

訳がわからない。

情報が少なすぎ、平行して考え、行わなければならないことがある、ていうか異世界に来て1日目で僕は何に巻き込まれている……

つか、わかるか、神様のバツキャロー!!

全てを神の責任にする事で少し落ち着く。

「で？」

「で、とは？」

「今は詳しい理由や込み入った事情はいらない。早急に欲しいのは、あんたの言っていることが信頼できる保証と命を預けられる人物かの信用」

「後者に関しては自分で判断してくれ」

「じゃあ、前者に関しては？」

「理由を語る。それで判断してくれ」

廃王子はゆつくりと空を見上げながら。

「耐えられないんだ」

「耐えられない？」

「俺はこの世界が好きだ。産まれ、育ち、見てきた世界だ。だから、この世界の人が苦しんでいるのが嫌だ」

「それがどうかしたか？」

「それだけだ」

「……………。(・ω・)」

本当にそれだけらしい。

正直、理由にも説明にもなっていない。

子供の我が儘みたいな理由。その両手におさまりきらない程に大きすぎるが故、誰も抱かない。

「……………つくは」

(*^m^*)

でも、気に入った。そのちゃんな理想も、幻想も。本当のところ何も力のない僕と、そうと知っていても勧誘してきた廃王子。

僕にこの世界の変革を頼んだ理由も、この王子に何があつたかもわからない。

わからないけど、とりあえず信じてやろうじゃん。

「わかった」

「本当かつ?！」

「ああ。まだ、協力するかはわからないが気に入った」

その上での取引。自分一人でも出来るだろう。が、やはり、地元の案内人はいるにこしたことはない。

「話を聞いてやるから、手伝ってくれ」

7・能無し勇者と廃位された王子（後書き）

ルナを出したい……

また三日後にお会いしましょう。

8 ・意外と希望は見えてくる（前書き）

これを書いている7月のある日の時点でお気に入りユーザーが増えてくれました。
わーい。

8・意外と希望は見えてくる

この世界でも一年365日、1日24時間3食のようである。

夕食前で客の出入りはまだ少ない定食屋の椅子につき、僕と廃王子は話していた。

「……で？その女の子達を救った後はどうする気だ？」

省略したが、廃王子は妻子を置いて僕らについてくることになった。まあ、その件で更に波瀾があったことは確かなのだが、今は無視！

「考えていない。とにかく逃げるつもりではあるけれど」

「考えていないって……逃げる方向もか？」

「大体の方向しか決めていない」

とにかく情報が少なく、推測しかできない状態だったからな。

最低限の装備や生活用品、及び逃げる方向すら考えられていなかった。

そういう意味では廃王子と話せて良かった。

「とにかく、移動手段が必要だな……陸地を駆けるのであれば馬が欲しいな」

どうやら馬はいるらしい、等と安心してはいけない。

さっきの波瀾の時、マジモンの魔法とか技能とか気とかを見せられた身としては、この世界で馬が生き残れるとは考えにくい。

別に文句はないけれど。

「山を越すのであれば？」

「山、ねえ。もしかして城の横側にあるあの山か？」

「ああ。相手も女性の足だからそこは避けると考えるはずだ」

「……成る程。結構急だからな」

その心理的盲点をつく。

当然、考えにくいだけで山を越したのではないかという可能性は考慮されるだろう。

間違いなく追っ手はこちら側にもくる。

それにリスクも高い。推測が示しているように考えにくい理由は危険だからだ。

そのことにも気が付いているのか、廃王子が渋い顔をする。

「危険だぞ？あそこは首都近郊とは思えない程に魔獣が住んでいる」

「……命を掛け金にするように申し訳なさ過ぎる賭けだけど、秘密兵器がある。信じてくれない？」

「……わかった。越えた後は考えているか？」

「取り敢えずは何も考えていない」

頷く廃王子。方向は決まった。ふと、思い付いたことを聞いてみる。

「鏡から帰れるなら、脱出させた後、鏡に入れば万事解決はしない？」

「出来そうにないことを知っていて聞いているのか？」

「まあ……」

さつき町中にある鏡で試したんだけどね。普通に入らなかった。帰るためには何らかの制限——時間か場所かは知らないが——をクリアしなければならぬらしい。

まあ、でも帰る手段が探せば見つかるという点においてはよかった。他にも脱出において重要な点を質問して、いくつか厄介な事はある

けれど問題なしという結論にいたる。

そして、もつとも嫌な話題に入ってしまう。

「食料や衣類、武器等の準備はどうする？」

「そうだな……」

食料や衣類に関しては間違いなくいるし、武器も持っていた方が良いには違いない。

だが、物の価値がわからないし金は……多いのか少ないのかわからない。少なく済めば一番なことくらいしかわからない。

「とりあえず食料は山を越えるのに十分な量が欲しい、かな」

「……つてことは予備も考えて20日分くらいか」

「夜はやっぱり冷え込むか？」

「わからんが、この季節なら死ぬ程はひえないと思う」

「じゃあ、毛布を6枚。あと服は18枚。中古でもいいんで最低限着れるのに」

「……この分だと銀貨5枚はかかるな。勇者はどれくらい持っている？」

「……金貨2枚に銀貨5枚。廃王子は？」

「金貨200枚は持っている」

この世界は銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨100枚で金貨1枚で、銅貨の下に様々な単位の紙のチップがあり、チップは100単位で銅貨1枚らしい。

さっきみたところ果物1つで1銅貨50単位だったから……

えーと、（。A。；）ポカーン

廃王子はすげえお金持ちでした。

「俺がここまで稼いでいることに驚いているみたいだな？」

「まあ、そりゃ……」

どう年増に見積もっても30越えて無さそうだし。そこまで貯めた、ということの目的は多分一つしかない。

……どうやら、本気で僕に頼み事をしたらしい。

僕のそんな表情を見て廃王子は笑いながら言う。

「まあ、仕方ない。半分は妻のお陰だしな」

「妻の？」

「ああ、召喚システムで“地球”という世界の“日本”ってところから来た。菓子作りがもの凄く上手いんだ」

それで浴衣とか切腹とかやけに日本っぽい味を出していたのか。

そして、お菓子作り技術で稼いでいる、と。だが、今はどうでもいいな。

そこまでの融資をして貰うからには、この人の言うこの国の人達を救わなきゃ。

何をどう救えばいいかさえも、まだわからないけど。

店の出入り口を見る。主人と少年奴隷（この国では認められているらしいが、認めていない国もあるらしい）がちょうど入って来るところだった。奴隷は貧相な体を悲しそうに曲げ床に座る。

店内を見渡すと客が先程よりも増えてきた。

夕食のピークまで後、30分って所か。

「王宮の夕食の時間はわかるか？」

「大体今から3時間以内には全てのところの食事が終わるはずだ」

それなら、準備の時間と合わせて丁度いいくらいか。

「荷物はどうやって運ぶ？」

「餌代はかかるが俺のうちに飼っている熊を連れていく」

なんと。この世界では熊すらも家畜の領域らしい。
これといってそれ以上の感想は浮かばないけれど。
じゃあ、そろそろ、はじめますか。

お互いに買う物を確認する。集合場所を決めて、一度二手に別れる
予定だ。

「3時間後にまた」

そう、準備は開始される。

8 ・意外と希望は見えてくる（後書き）

次回からは一週間周期になります。ご了承ください。

9 ・奴はすでにそこにいた（前書き）

何か結構人気みたいでビックリしています……
読んでくれている皆さん、ありがとうございますー

9・奴はすでにそこにいた

街中で武器を手に入れ（一応6人分と予備2本。値切りに値切った）、冒険必需品を手に入れ集会所に行き、合流。その後、城壁づたいに城の横手に向かう。

そして、熊を従え、廃王子とともに城壁から出っ張っているうちのどれがああの部屋かを探している時だった。突然声をかけられる。

「お。親友君、遅かったな」

（・・・）

振り返ると親友であり両想いではあるけれど、恋人ではないという複雑な関係にある相棒、こと月島瑠奈に待たれていた……。

まあ、予想通りではあるけれど、彼女一人しかない。

彼女はトテトテ、とこちらに歩いてくるとそれはそれは美しい動作で廃王子の腰に下げてある剣を抜く。

夕日を浴びて光る、剣。照らされる奴の美貌。思わず見とれてしまいそうだ。

廃王子は動かない。

……自分の置かれている状況がわからない、というのが正解かもしれない。

（・・・）g”仕方ない。

僕は迷わず買ったばかりのロッド（木の棒。個人的には仕込み杖という名前の方が好み）を上から叩き付ける。

「ウオッ！」

突然、目の前を横切ったロッド（仕込み杖という名の方が好み）と左腕を横切った剣に驚きの声をあげる廃王子。

いやあ。間に合ってよかった。

「親友君。この男に騙されているのか？」

僕のことを見ながら聞いてくる奴。毎度のところながら順序がおかしい。

「おいおい。そこにいたるまでの過程を抜かすなよ」

「確かにいきなり騙されているのかどうかなどわからないからな」

「そうそう。さあ、リテイクといこうか」

「うむ」

「あの……。いや、俺は何故殺されそうに……。？」

そう、頷く奴。魔王子は何やらオロオロしているが無視。

「親友君。後ろの奴は知り合いか？」

「ああ」

「何故ついてきているんだ？」

「成り行きかな？とりあえず説明は後ですよ」

「わかった。始末しよう」

（……）／待てい。

まあ、対人恐怖症でいつも人は悪意に満ち溢れている。そう考えている彼女に新しい人物を見せると何時もこうなる。

特に僕が絡むと殺人未遂にすら走るから危険だ。

……不器用に僕に甘えているだけかも知れないけれどね。

「ははははは。特殊な人だなあ」

何かを達観したように奴から離れ、遠くを見つめる廃王子。山を越えるまで彼の胃袋が持つかは果たして疑問だ。命の保証だけはさせてもらうけど。

「とにかく剣を放せ。どちらにせよこの人に次の町まで案内してもらうから」

「……いや、いくら私でも素手と剣ではキツイぞ？」

「裏切りが前提？とりあえず僕にはロッドがあるし、君の分の剣も買ってきたから」

背中から包みを下ろす。そこから銀でコーティングされた紋様のはいつた鞘付きの剣を取り出す。

武器屋で一番値が張った代物だ。

奴に渡すと顔がほころぶ。うん。嬉しい限りだ。

(^ - ^)

「こ、これは……」

「武器だ。予備は全部で2本しかないから気を付ける」

「わかった。……指に刺していいか？」

赤くなりながらモジモジと上目遣いに聞く奴。指輪とでも勘違いしているのだろうか。

このままだと、その白い手も物理的に赤く染まってしまうだろう。

「薬指がなくなるぞ？」

「……何を言っているんだ親友君。薬指は指輪をつける大切な指ではないか」

そういう問題ではない。あと、常識ないな、という感じで言われても知るか、わかるかそんなもの。

「わかった。とりあえず腰にさせ」

「……初めては親友君の予定だ。例え、生物で無かるうとそれは譲れない」

「真面目なのか、ボケているのかは知らないが、お前は剣をなんだと思っ*て*いやがる！」

一応、生物の殺傷目的でつくられているんだぞ！思わず少し大きな声で突っ込んでしまったが……まあ、今更な感がある。

一々突っ込まないと僕でも胃が持たない。

奴は小首を少し傾げながら笑んで、頬を更に赤らめるようにして小声で言う。

「大好きな親友君の贈り物」

ぐう……。直球。ど真ん中ストレート。

馬鹿な。……ここまでの威力があるとは。思わず手に持ったロッドを取り落とす。

「ありがとう、親友君」

奴は柔和な笑みを浮かべたまま、近付いてきて……僕の顔目の前10?のところにとまる。

ゴクリ、そう喉が鳴ったことを悟られないように顔を背けるが頬に吐息がかかる。

「しんゆう……く……ん」

苦しげに頬を赤く染め上げながら擦り寄る奴。いつの間にか押し倒されていた。

それにしても、奴の様子がおかしい。普段ならこれ以上は踏み込んではいないはずなのに。

再びかかる吐息。阻害される僕の思考。跳ね上がる心拍数。服越しに伝わる湿気、体温、そして、柔らかさとともに伝わる鼓動。妖艶な何かを男に感じさせるムズムズした動作。そこで気が付く。

——…いや、僕も男の子だから、かなり下の方は限界に近いけどさ。キスくらいしても構わないけどさ。前にも言った通り自分しかない今の状態で選ばれるのは嫌なのと

「……そういうのは結婚してからだよな」

僕は奴の鳩尾を思いつきり殴る。急に体が弛緩して僕に倒れかかるようにもたれる奴。気絶している。糸巻きを探そうと辺りを見渡すと廃王子がすでに見付けてくれた。た。

「スツキリしたか？」

「やらねーよ。大体において結婚もしてねーし」

「固い貞操観念をお持ちで」

「……他の子も似たようなもんだろ。こりゃ苦労しそうだ」

廃王子はビックリしたような顔になる。その後で少し笑った。

「勇者は勇者、ってところか」

どうやら、正解のようだ。媚薬でも盛られたのだろっ。

そうでなければ奴の行動に説明がつかない。

性行動は案外複雑な行動なので簡単にはコントロールできないと思

うのだが……

強壮は元々精神的な要因が大きいし。

が、確かに性行動には中枢神経、特に大脳の辺縁系が大きな役割を果たすから、そこら辺を魔法薬とかで食事に混ぜて摂取させ、興奮させたのだろう。

「どうせ僕は名前だけの国王が妾を喚び出すついについてきた、勇者だよ」

「謙遜をするな。本当のことだけだな」

「でも、なんで勇者なんだ？ 殺せば手っ取り早いのに」

大体において渡された金額も大きかったし、奴まで見せるか、普通……後者に関しては馬鹿なだけだろうけど。

「実際に魔国に魔王っていうものがこの国の敵として存在するからな。万が一にでも倒せたらラッキー、って感じでおだてて送り出さるんだろ」

「成る程。異世界人ならこの国が攻撃した証拠にはならないしな」

「それに、後宮の維持費と一部の官僚の給金、あとは王室維持費くらいしかかからないから、金は余っているという話だし」

「……よくクーデターが起こらなかったな」

本当にあの王の首がついているのが不思議だ。

「で？ 僕の推測は正しいのか？」

「おそろくな」

「で、あんたは媚薬におかされた少女を襲う狼さんか？」

「まさか。浮気はしないよ。君はどうする？」

「僕もやめておくよ。初めての相手は決めてあるし」

この国の悲惨さを再認識する。

多分3日間、媚薬を続けて性に狂わせようとしたのだろう。……外道が。

僕は地面に落ちていた、鑢のようなもので削られた鉄格子を拾う。そして、その直下へ。さて、脱走させるか。

9 ・奴はすでにそこにいた（後書き）

今回の更新は来週の水曜日（8月3日）です。すみません遅くて

10・意外と警備は薄かった

昔、忍者が橋をない谷を渡るために矢と縄と糸を使ったという。方法はまず縄を糸に、糸を矢につけて向こう側に飛ばす。そして、向こう側の仲間が矢についた糸を引っ張り、縄を手繰り寄せる。そして、両の端を固定し縄づたいに渡る、というわけだ。

縄なら重くて矢は飛びにくい、紐なら重さをほとんど感ずることなく飛んでくれる。

向こう側に仲間がいることが前提であるけれど橋などなくても向こう側にいける。

ここで仲間がいないと無理なのか、などと思つてはいけな。実在の忍者はあくまでも人間であり決して漫画みたいにドロン、といった術を使えないし、特殊な体の構造をしているわけでもない。

だから、相応の度胸と筋力があつたことを評価するべきなのである。

まあ、そんなわけで――

「よいしょ、っと」

糸巻きに残っていた紐を引っ張る。

少し伝わる抵抗。そして、蝶々結びにしておいたロープがほどけたのだろつ、解放の感触が伝わる。見た限り紐は切れていない。

上の窓を見上げる。

黒髪が僕達に向かって一瞬何かしらの合図を送つた。

――……うっし。成功だ。

思わず握り拳を握つてしまふ。

「ところであの娘はどうやってこの城から抜け出したんだ？」

黒髪がおそらく他の娘のロープを切っているのであろう、その時間に廃王子が尋ねてくる。

あの娘、って誰だ、と一瞬思ったが奴しかない。

「瑠奈はなんというか特殊でな……」

「それは知っているが」

「日常的に逃げるための装備を隠し持っているんだ」

」(・、・;)「

余談だが、何故奴が夕食が終わるまでに逃げ出さず、夕食を食べたのかは不思議。

後日聞いてみたら、迷子になった時はその場に待機、と脱走する時に油断させるための布石と答えられた。

昔なら食わずに一目散に脱走したところだ。それがいいことか悪いことかはわからないから置いておこう。

少なくともこの件に関しては、夕食時に一人脱走しているのが見つかり、警戒が強まるみたいなの^{バッチ・エンタ}結末にはならなかったのだからよしとする。

あと、一つだけ朗報。リュックがありました。

(^o^)/

奴が持っていました。2つとも。

やはり、こちらの世界より元いた世界の方が何かと技術は上なのでいい服が着れるのは嬉しい。

うん。ユ。クロは流石だ。着心地もいいし、値段は良心的。世界最高の服屋と言っても過言ではないと思う。

もつとも他の服屋は知らないけどね

そんなことを思っているうちに女の子達が降りてくる。確認と同時に目を背ける。

万が一、スカートをはいていて、下着が見えたりして、変な空気になつたら嫌だもん。

「やっぱり親友君は彼女達を助けたか」

(・o・)

横からかけられた声に少し驚きながらも振り向くと奴の姿が。

……いくら君がチートな性能を持っているとは言え、男子高校生の本気の鳩尾パンチを喰らって何故こんな短時間で回復していらつしやるの？

しかも、平然としていて、痛そうな様子すらないし。剣道、少しかじっていたんだけどなあ。

まあ、それはともかく――

「当然だ。放っておけるか人として」

風紀部の部長としても放っておけない。あの王様の行動は日本人の倫理を逸脱し過ぎている。

「奴等は親友君の命を狙っているかも知れないのだぞ？」

「何か僕は命を狙われるような事でもしたというの？」

「人が人を殺す。その理由なぞ星の教程あるさ」

(――)

確かにそれはそうかも知れない。

人は誰だっかわかっている。自分の存在が明日の今には、或いは今この瞬間にも消えてしまいかも知らない事を。

そう考えてしまうときりがないし誰も信用なんて、信頼なんてできない。

でも、でも――

同じ時に存在する物全てを疑い、遠ざける生き方なんて、そんなのは、

「悲しいし、寂しすぎる」

上手くは言えない、ただの感情論ではあるが、強く思っただ。

「何か言ったか、親友君」

「いや、何も」

（・・・・・）

ほとんどの人はそれを割り切れる。

なのに、彼女はできない。

これ以上は考えたくないが、自分すら満足にわからない自分が、本当に憎らしい。

「勇者」

くだらない事を考えていると、廃王子から声がかかる。

見ると今日、部屋で見た美少女4人全員が大集合していた。

悲しい事に何故か僕から微妙に距離をとっているけどね。

まあ、蛇足をしてしまえばこの後、やっぱりその4人と廃王子を始末しようと奴が暴れて、僕がなだめると言うお約束が発生した。

そんなわけで、勇者一行はドタバタした救出劇を終え、山を登り始めたのであった。

10・意外と警備は薄かった（後書き）

ちよつと次はいつできるかわからないです……
もうすぐ重要なテストがあるので……
では会えたら一週間後に

一章あとがき（前書き）

本編とは何も関係ありません

一章あとがき

僕「本名が未だに出てこないため、勇者でもないのに便宜上勇者と呼ばれ続ける僕と」

瑠奈（以下瑠）「私、こと月島瑠奈の」

二人『一章エンディングトーク!!』

作者・兄『イエーイ!』

僕「さて、ようやく一章が終わったね」

瑠「うむ。よくぞここまで辿り着いたものだ」

僕「刺激的なタイトルでみんなに見てもらおうと画策した結果」

瑠「タイトルから出来たキャラクター達に」

僕「残念な王様に定番のモンスター達（↑出てきていない）」

瑠「一体どうなるのだろうな」

僕「本当にね」

瑠「……………」

僕「……………」

瑠「……………」

僕「正直、話すことがそれ以上思い付かないんだけど」

瑠「じゃあ、私達のノロケ話のエピソードでも」

僕「うん。やめて。仕方ないから初期設定ネタ資料を作者の机の引き出しから取ってきたから」

瑠「仕方ない。次の2章のエンディングトークの時にとっておくか」

僕「その時はその時で全力で防ぐと思うけど、……………って」

瑠「親友君?どうしたのだ?」

僕「いや、ネタ資料がね」

瑠「どれどれ?」

城から出て高原を歩いていくとファンタジーの住人であるスライムがでてきた。

一応左上に表示されている自分のLvは1。前述したように戦士と書かれている。

「親友君！なんかヤバイの出てきた！逃げるよ！」

そう言つて瑠奈は棒で罾が仕掛けられていないか確認しながら、超スピードで逃げていく。

そんな彼女は勇者様。

後には僕だけが残された。……つて、え

「仕方ないな」

正直、早く魔王倒して戻りたい。そのためにはモンスターを倒してLvをあげるのが一番手っ取り早い。

だからこれはきつと必要悪だ。

うん。許せ、スライム。

やあ、やあ、と30回程叩く。何回か反撃は喰らったものの相手のHPバーは後ちよつとだ。おし、これなら――

「危ない！親友君！」

次の瞬間、お空にスライムが舞い、遠くの山が半壊した。そして、目の前にはスライムに止めを刺し、Lv2に上がった勇者様。止めを刺していない僕は経験値を貰えずLv1のまま。

「……何をするの」

「いや、あの生き物が爆発する可能性もあつたからな」

「それっ、どんな生物？！」

「ほら、魔王様万歳みたいな。現に爆散したではないか」

そう言つてビシッ、と半壊した山を指差す勇者様。能力はすでに十分だ。

多分RPGとかだったら勇者の性格を鍛えるゲームになるだろうね。Lv2だけど。

一応突っ込みを入れておく。

「君が投げ飛ばしたからに決まってるじゃん」

「まさか。私は山まで投げ飛ばすのが限界の普通の人間だ」

（以下作者的黒歴史的延々とつまらないボケと突っ込み）

僕「……………いたたまねえ」

瑠「うむ。いたたまれないな」

作者の兄（以下兄）「というか、王道を書こうとして書ききれなかったかんが否めねえ」

作者（以下作）「うん。だから邪道に走ろうと思った」

兄「邪道にもなりきれてないけどな」

作「……………いいもん。王道のラブコメだもん」

瑠「……………私のこの性格及び親友君の生殺しを見て、そう言えるとは大したものだな」

兄「ああ。反省の欠片もない」

僕「そう思うなら性格を直す努力をして欲しいし……………何より月島瑠奈の性格考えたの作者の兄なんだけどね」

作「……………何を言ったところで無駄さ」

兄「さて、そろそろ締めめの台詞に入ろうか」

作「……………うわあ。あっさりスルー。しかも良いとこどり。ま、いいか。2章の主要人物さん達、お願いします。試。召喚^{サモン}」

兄「何か召喚された?! 試験召喚獣の召喚のはずだよな、それ!」

僕「あいあい」。2章は山を抜けるお話です」

瑠「親友君は相変わらずだ」

マ「親友さんが闘います」

ア「……………丸」

コ「ゴボツ」

ゴ「キキツ」

オ「チュイ、チュイイイ！」

兄「わっけわかんねえー！誰？！え、この人達誰っ？！」

作「次回の登場人物さ」

兄「本編に出ていない人物だすなよ！しかも、人外のものが混じってるよなあ絶対！」

作「うん。まあ、よしとしておこつ」

兄「それもそうか。（終わりそうにないし）」

作「そんなわけで2章もよろしくお願いします！」

一章あとがき（後書き）

一度やってみたかったのです……
来週からはちゃんと本編に戻るので今週はご了承ください

0・英雄達の軌跡？

その女は目を醒ました。

そして、息も絶え絶え、命が危ない程の重症を負い倒れていた事を思い出した。

斬られたお腹を擦ってみる。

正常な肉体。特に違和感はない。血も出ていなければ、痛くもない。ただ、不思議な爽快感と、活力に満ち溢れている。

そこで女は疑問に感じる。ここは何処だ、と。

見回すと質素な藁作りの小屋に一人の青年が椅子に腰かけていた。外見年齢の割りに老成した印象を受ける。

訳のわからない。

そついった感じに辺りを見渡す女に向けて、青年はこう言った。

「初めまして、勇者様。突然ですが、ともに闘って頂けませんか？」

その女の名は——エミ・クラハ。

後に初代勇者として、そして、神殺しとしても語り継がれる伝説の勇者である。

『英雄伝——2章 勇者の誕生』ルーナ・フ
アンティーク・セード著より一部割愛

1・休みとか敵とか毒とか

王城から逃げて5日。道中の色々な騒ぎを書けば書ききれないが、
ともかくにも一人も欠けることなく僕達は山を越えた所にある都
市へ着実に進みつつある。

そこも王国領らしいから、安全を見つけることはあまり期待できな
いだろう。

が、この山々を回り込むと時間のロスが激しいらしいから追っ手が
来るまでの間、一息はつけるはずだ。

さて。

僕は太陽が少し顔を出した、薄く霧のかかる山中で腰を上げる。
隣を見るとやっぱり奴が縮こまって毛布の中に丸まっていた。

寝る前は少し離れた広場（ここより少し先にある女人専用の寝所）
にいたから、二度寝に来たのか、眠れなくて来たのかどちらかな
どちらでもいいけど。

ん？何ではなれているのか、って？山中で離散したら危ないんじや
ないか、って？

（ハ―ハ；）

いやあ、正しいんだけど、どうにも城内での強制猥褻^{レイプ}発言が悪かつ
たらしくて、狼さんに認定されたんだ。

廃王子もあの王様の血族だってことで同じく狼さんに決定されたみ
たいだ。

僕達が夜番しようとする笑顔で拒否られるもん。

仕方なく、お互いの安眠のためにこういう措置をとらざるおえなく
なったわけだ。

「……洗濯でもするか」

廃王子の方に置いてあるリュックサックから5日の間に汚れた服を取り出す。

そして、昨日見つけておいた洗い場に向かう。

今日は洗濯のために出発は夜、軽めに。昨日、着る服がなくなつた女子陣からの要求だ。

全員、同じ服を2日ならともかく3日は着たくない、と言つたのだ。逃亡生活中に何を暢気な、とは思つたが確かに一昨日、4日前に着た服の匂いを嗅ぐと、ちよつときつかつた。

更に、昼夜問わずに最速で行動してきたので、最短で明明後日には都市につく。

何より疲れた。そういった理由である。

大きく伸び。念のためにロッドとポーチを準備する。

服を持って昨日見つけた水場に向かう。瑠奈の分も、廃王子の分もついでに持つていつてやる。

女の子の下着を洗うなんて、なんて思つた人。元々僕の家にあつた布を利用した上下着さうじと元々僕の下下着パンツを洗濯する、という状況下で興奮できる？

ぶつちやけ、好きな女の子でも僕は無理だし、女の子という神聖な像が崩れ落ちてしまった感が否めない。

……奴が特殊なだけという意見もあるけれど

あと、当然だけど奴が使用済みのトランクスをそのまま自分のに流用したことはない。

逆は多々例があるけれども、ね。

「……っ！」

(・ー・)

あと一つ茂みを抜ければ、ちょっとした滝が流れ落ちる水の溜まり場につく。その時に殺気を感じた。

周りを見渡すと、永遠のファンタジーの住人こと、灰色のブルドッグっぽい顔をした小さな動物を見つける。コボルドだ。

元々赤い眼を血走らせ（ているみたいだ。本当のところ地なのかもしれない）、スパイク、とこの世界では呼ばれている打撃武器をかかげ、猿の如くウキャウキャ騒いでいる。

まだ、僕を見つけてはいないみたい。

「よし、逃走するか」

三十六計逃げるに如かず。余分な争いは避けるに限る。

臆病？卑怯？

いえいえ、賢く生きるためには大切なことです。

そのまま、迂回して上流にまわる。

「にしても……」

（・o・）

あつちの世界の家族は元気だろうか。

あの家族も僕だけがまともだったからな。兄貴の奴、また厨二なことを言っていなければよいのだけれど。

その厨二な世界観に巻き込まれているような気が強くするのは、きつと気のせいだ。

（ノー>。）

あ、目に埃が。

つかの間のホームシックを感じながら次々に洗濯物を川で濯ぎ、踏み洗い。

終わったらそこら辺にいた蛙をロッドで虐殺↓毒腺から搾り取った毒を種類ごとに分け、瓶に仕舞い、ポーチへ、を繰り返す。日本には死ぬような強い毒をもつ蛙はいないので誤解されがちだが、蛙毒は結構毒性の強いものも多い。

それこそ、視力ぐらいなら簡単に奪える程の毒をもつものも。

次に、殺した蛙を餌にして蛇を誘き寄せる↓生け捕り（毒を回収した後、報酬に蛙をくわえさせ遠くへ投げる）↓毒を瓶に仕舞い、ポーチへ。

少し嘗め、しっかりと体への効果を調べておく。

……ムウ、これは血压が急に低下しやがる

） よい子は真似しないでね

何に使うのかって？基本非力な男子高校生の護身用に決まっているじゃないか。

普段日常から使っているし。ロッドにも自分の意志で仕込んだものを放出できる仕組みをつけてもらったし。全長180cm。木製のこのロッドの上端部は5回ねじるとれ、そこに毒を仕込めるようになってる。

更に簡単な魔法が付加してあるらしく、上端部にある小さな穴から自分の意思で毒を吹き出せる、ということんでもない武器なのである。

（・・・・・）

ゲームみたいに職業が表示されるなら勇者というより暗殺者^{アサシン}が一番似合っているのは気のせいかな……？

その後も体を沐浴させたりしていると時間はすぐに過ぎる。太陽もそこそこ登ってはいるが、昼、とはちょっと言えない朝の真っ最中。いくら連日の行軍で疲れているとは言え、もうすぐ起きるだろうと

予測される。

皆が起きる前にそろそろ戻ろうか、そう思ったまさに矢先。

全裸で沐浴している川の下、丁度さっき興奮したコボルドがいた方から甲高い悲鳴が聞こえた。

それは5日前から何回か聞いたことのある少し高い以外にはさして特徴のない、茶髪的美少女の声だった。

2・奴の恋は少しおかしい(前書き)

1万PV突破!!

いつも読んでくれる人に感謝です!!

2・奴の恋は少しおかしい

「きゃあああああ！」

水の流れ落ちていくその先。ここからは死角になっ
ていて見えない場所。

さつき、興奮したコボルドがいた場所から悲鳴は伸びてくる。
その2つの事柄を組み合わせると自ずと答えに辿り着く。

「……つち！」

本当に悔しい。僕の頭は本当に平和ボケしている。

あの水場は危険だと、一言他の人に伝えておけばそれだけで済む話
だったのに。

慌てて川から出る。近くにあったロッドを手にとり、ポーチを走り
ながら装備する。服は……下着しか着けていないが、他を着ている
暇はない。

とにかく。

急げ、^{いそ}忙げ、^{いそ}勤げ！

草に足がとられる。でも、そのまま走り続ける。

「翔んでやるっ……！」

前傾の姿勢を保ったまま水が落下している地点に辿り着く。2→3

Mの高さ。

高い。

でも、決して跳べない程では……ない。

ようやく見えてきた下の光景は予想通りだった。少し深い水場を茶
色の髪の女の子が逃げている。

そして、コボルドが囲むような陣形をとりながら接近をしていた。数秒間の飛翔。上へ上へと上がっていく景色。

衝撃に備え足を軽く曲げる。バランスをとるため両手を横に引き延ばす。

丁度、水を跳ね上げながら、敵と茶髪コボルドの間に着地を成功させる。

「……あつ、……あつ」

「何も言うな。生き残ることに集中しろ」

数は6体。目は相変わらず血走っていて、各々木製と見受けられるスパイクを片手に持っている。

空から降ってきた僕を見て戸惑っているのか動きを止めていた。

その間にポーチから2つの薬品を出す。

柑橘類系の果物の皮から搾った液体と、さつき蛙の毒腺からとったおいた毒。

まずは前者を左側に展開している3匹にぶっかける。

犬は大抵この匂いが苦手だから、という理由だが、やはりこの犬みたいな生物も柑橘類の匂いは嫌いみたいだ。

元々クチャクチャな顔を更に歪めて顔を水に沈める。間合的にその間に攻撃を加えるのは不可能そうだが、時間は稼げる。

次に向かってくる右側の敵を尻目に、特殊加工をしてあるロッドに後者を仕込む。

「ボゲツ」

「……はっ」

ついにスパイクが届く間合いになってしまふ。コボルドが獲物を両手に握り直して大上段から叩きかかる。

仕込みを終えた僕は剣道の要領でロッドを下段から上へ。

思いつきり降り下ろすことしか考えられていないスパイクは弾かれ、軌道を変える。

攻撃を外した後、できる隙。それを逃してはならない。

ロッドの腹で灰色の胴を横殴りに殴り付ける。くの字に折れ、グタリ、と動かなくなる。

それと同時にロッドについている付加してもらった魔法を発動させてみる。

その名は“霧吹”^{ミスト}。名前の通り、仕込んだものを物を穴から霧吹きのように噴出してくれる。

蛙の毒が後ろでサポートしようとしていた一体にかかり、相手は視界を失う。

膝までの深さがある水の抵抗を受けながら、右側のもう一匹をロッドの一撃で沈める。

「行くぞ！」

ようやく出来た右側への逃走経路。同じ二足歩行ならどう考えてもコボルドよりも人間の方が早い。しかし

「……ひゃう」

バシャン、と言う軽い水音。

茶髪はそう言っただけでその場にへたれこんでしまったようだ。

左側のコボルドはもう、既に回復して近付いてくる。

今、沈めた右側の敵も殺してはいないから、時間が経てば復活してしまうだろう。

茶髪を抱きかかえて逃げることも考えた。が、それはいくらなんでも追いつかれるだろう。

ロッドで牽制をしながら、なんとか茶髪と逃げる、という意志疎通

をしようと後ろを振り返……

「……ぶっ」

っていないぞ！

多分水浴びでもしにきて裸なのだろう。

しかし、現代日本ではとてもお目にかかることが出来ない位、澄んだ水のおかげで見えなかった。うん！断じて！

……というが無防備過ぎるんだよ。

「親友君！」

鼻にくる何かを感じながら岸を見ると、青色男性用の寝間着をきた奴がいた。

ソードを片手に持ち、左手から凄まじい早さでこちらに向かってくる。

その後、勝負は一瞬でついた。逃げようとすら相手は出来なかった。奴の剣は6回空間を薙いだ。たったそれだけで、川は赤く染まり、顔が赤くデコレートされた。鉄の匂いが酷い。

「……よかった」

奴は、それだけを言って茶髪よろしくへなへなと川に座り込む。

「親友君が……生きていて、よかった」

「……すまない」

少し反応が大袈裟だと思うが、暗い気持ちで謝る。自己嫌悪等が混

じりあう、物凄く嫌な気分だ。

川に浮かぶ犬顔を岸まで運び、その胴体もしっかりと岸まで上げる。愛用していたスパイクも一緒に。

その後、上流に置き忘れた荷物を下に運び、いまだにガタガタ震える茶髪の様子を見る。

奴の配慮かどうかは知らないが、ちゃんと隠すべきところは隠されていた。

(^ー^)

「……瑠奈。お前が他人に気を使うなんて珍しいな」

ちよつとだけ茶髪が奴に殺されるかも知れない、と上流に行ったことを後悔した僕は間違っていないと思う。

「私は利用価値がある相手と親友君にだけは優しいぞ」

頬を膨らませ、着衣したまま水に浸かり、不満そうに訴える奴。

「……人を信用しないお前が何に人を使うんだよ」

「うむ。親友君の妾にちょうどいいと思ってな」

「……………」

(-o-;)

思わず茶髪に近付くために動かしていた足を止める。

今、こいつは何をほざきだした。

僕は今のところ君一筋だよ。手、出さないのも理由があるんだから。

そんなに節操なく見えるのか？

……とはいえ、これは僕が言うべきことではないし、自分で気付い

て欲しいことだ。

「いや、私も考えたのだ」

「何をだよ……」

「親友君のことは大好きだ。が、万が一、その……私が親友君の好みから外れていたでしょう」

「それで？」

(・ー・)

仮定自体があり得ないんですが。

とにかく茶髪の方に向かい、様子を見る。

よっぽど怖かったのか安心していった。気付けを行っておく。

「優しい親友君のことだ。頼み込んだら、発散担当くらいには愛してくれるだろう」

「……後半部分は聞かなかったことにしていいな？」

「ここで問題になってくるのは本妻との関係と信用問題、及び世間の目だ。しかし、本妻を納得させてしまえばいくらで世間など誤魔化せる！」

「うん、ごめん。自分の話のはずなのに驚くほど親身になれないわ」
ホントにビックリだ。

「しかも、一度命を助けたとなれば、恩を売ったも同然。親友君を殺すなどという発想は独りでは産まれないだろう。しかも、もしその思想を売り込む奴が……(以下略)」

(。；)

もう、なんか疲れたわ。

その後も延々と続く奴の演説を無視する。

…………… 本当に疲れた。

茶髪の頬をぺちぺち叩く。すると、ようやく焦点が合ってきた。
キヨロキヨロと茶髪は辺りを見渡す。そして、コボルドがいないの
を確認。

「…………… つ。こ、怖かつ、た」

同時に震える両手で首にかじりつかれる。
様子を見るために中腰になっていた僕は思わずバランスを崩す。

「…………… っ！」

柔らかい大きな弾力が胸にあたる。川底に茶髪の頭がぶつかりそう
になる。

慌てて手で保護してあげると、抱き合うような形に。案外深い水深
に呼吸系がやられたのか、咳き込みながら更に強く抱きついてくる。
むみゅう、と弾力のある胸が鳩尾に。

胸が、足が、顔が僕に絡み付く。

こんな足場が不安定な川底で起き上がるのは危険すぎる。必然的に
今の格好に茶髪が正常になるまで妥協する羽目に……

「いいぞ！親友君。やってしまえ！」

「やらないよ！」

奴が何か達観したように、腕を振り上げながら叫ぶ。

君、僕のが好きなんだよねえ？！

僕、君のがわからないやつ！

でも、トラブルはこれでは終わらない。

「ふつ。若いねえ、勇者」

「忘れた頃にやって来るな、廃王子！」

「……やっぱり狼さんなのね」

「うわぁ。……死ねばいいのに」

「誤解だ！」

「……………」

「せめて無言は止めて！」

そして、今頃やってくる勇者様ご一行。廃王子、黒髪、赤髪、青髪様4名のご到着。

どうみても茶髪を押し倒していると思えない、この状況。

……………

「私も加わって3Pの方がいいか、親友君？」

「誤解を深めるな！」

「あゝ！もう焦れたいな、親友君！人の目なんて気にするな！」

「……………」

「……怖かったよう」

「……終ったな」

人生で初めて“終わったな”と思ってしまった出来事だった。

2・奴の恋は少しおかしい（後書き）

次回は休むかもしれません。また会えたら一週間後に

3・不意打ちはやめて欲しい

夜の山の空気は冷え込む。ここが異世界であろつと夏っぽい季節であろつと、だ。

結局、あの後、赤髪に蹴つ飛ばされそうになり、奴がそれを阻止するために跳び、黒髪が僕に倫理観及び節操に関して長々と説教してきて、奴が邪魔をしにくる。

そのせいで誤解を解くのに時間を費やし過ぎてしまった。

川岸にあったコボルドの死体を片付け、洗濯を全て終える頃には日は暮れていた。

家畜化した気性の大人しい熊。その憐れな生き物が背負っている荷物から携帯食料を取り出す。

今日の夜営地の広場を出て、少し歩き、谷へ。さつき見つけておいた場所だ。

崖から落ちないように細心の注意を払って足を投げ出す。ようやく座れた。

そして、食つ。味気なさ過ぎる夕食。

思わず、元いた世界を回想してしまう。

僕の瞳が映すのは闇。深淵。どこまでも深く、濃い、黒。

「し、しんゆうさん」

そんな風にボー、っとしていると後ろから少し高い声がかかる。

肩までかかる短い茶色の癖っ毛に完全に奴よりも幼い感じの容姿。

多分、この世界とも僕達の世界とも違う世界で産まれたのであろつことを示す白銀の瞳。年齢は推測14歳。わりに胸が大きい。

振り返るとその特徴のよく当てはまる茶髪がいた。

「おう。なに、茶髪さん」

話しかけるのに少し緊張していたみたいだから、フランクに声をかけて解そうと試みる。

ただの人見知りなだけ、っぽいから、無駄かもしれない。けど、今はそこまで気を遣いたい気分でもない。

「茶髪、つて……」

どうやら僕の呼び名が気に入らないようだ。俯いて、目を伏せ、ブツブツと何かを呟いている。

「誰も名前を覚えてくれないからな」

「でも、もつとなんか、こう……いいあだ名はなかったんですか？」

「うーん」

ない、よねえ。あだ名なんて直感と語呂でつけるものだもん。

茶髪はトコトコと僕の隣までくると座る。

「マロン・ウィストです。後ろがファミリーネームですね」

「唐突だな」

「……助けてもらった上、あんな醜態まで晒した相手に名乗りもしないのは礼儀に欠けると思うので」

成程、と少し納得しかけた。が、よく考えたら二回目じゃない？助けるの。

「……城からの脱出を手伝わなかった？」

「あの時名前すら教えてもらえないのは自業自得です」

(^ ^ ;)

そんなに嫌がられる発言だったんだ、あの言葉。いや、風紀部でも口に出した瞬間にグラウンド5周が義務づけられていたけど。

苦笑。風。闇。肌寒。

「じゃ、ウイストさん」

「名前でいいですよ。ボクも親友さんと呼ばせて頂きますし」

「い、いや。その……僕には心に決めた人もいるし……ウイストさんで」

「マロンでお願いします」

「だから、誤解されるのも」

「マ・ロ・ン」

(. . .)

オーケー。名前しか受け付けなくてことね。でも、しっかりと線引きはしておこう。

「マロンさん」

「はい。何ですか？」

よし。意志疎通に成功した。

じゃあ、奴の妄言について謝罪をしておこう。

「ごめんなさい」

「何がですか？」

「瑠奈が何か変なこと言って」

「瑠奈………？」

その名前を聞いて頭を捻るマロンさん。……美少女、っていいね。どんな格好でも様になるから。

ところで、何か疑問点でもあるのかな？

「ああ！あの金髪さんですか」

君に僕を非難する権利はなかったと思う。

「というか、名前知らなかったの？」

「基本的に喋ると体力を使うから、って昼夜問わず倒れるまで前進させたのはどちら様でしたっけ？」

「記憶にございません」

いや、あるけども。

城から離れれば離れる程、どちらに逃げたかわからない相手にとって鬱陶しいことはないだろうし。

「まあ、とにかくそんなわけで何度か話したことはありますが、この世界に来てから名乗ったのは、これが初めてですね」

「それは、光栄なことだ」

「で、何を謝っているのですか？」

(^ー^;))

あゝ、なんと言つか今は察して欲しかったんだけど。深く話したい事じゃないし。

「いや、昼間にさ、あいつが吐いた妄言のことなんだけど……」

「……いつも個性的なおっしゃっていますので、どの発言かはわかりませんが」

「あー、うん。それは好きな人でも否定できん」

奴が変人なのは今更感が溢れて、残念な程のありふれた事実だ。本

当にそういう面も引くるめて好きなんだから僕という人間は本当にどうしようもない。

でも、その好きな面すら……

いや、これ以上はやめておこう。

「もしかして、あの妾がどうたらとか言う発言ですか？」
「あ、うん」

(. .)

「気にしないでいいですよ。少しビックリはしましたが、問題はありません」

笑うマロンさん。正直、倫理的観点からすれば僕の発言と大差がないのにそう簡単に許されたのが不満だが、よしとしよう。

(^ー^)

少し笑う。安堵の笑みだ。

「安心したよ」

「ええ。あなた」

「承諾の方で問題がなかったのっ?!」

w (o) w

驚きのあまり足を滑らせ谷へと落ちそうになる。

「ところであの女は何だったの？仲良さそうだったけど、気のせい、だよな？」

「ジャパーニズカルチャーが浸透しているっ?!」

あつれえ？この子どう見ても僕達の世界の子供ではないんだけど。

「妾の断りなく不倫するような節操のないひとではありませんよね？親友さんは」

「突っ込むべきところがあり過ぎるから、その中でももっとめ突っ込まなければならぬところに突っ込みを入れるとするならば……」

「あ、飽きたんで。もう言い訳はいいです」

「飽きたんかいっ！」

(、ε、)

そう言つて笑い合う。

(ω)

異世界でもこのような馬鹿らしいけども、楽しい。

騒がしくもおかしい。

奴が受け入れてくれる、誰もが当然だと納得できる空間をつくる能力があると、傲慢にも僕は思っていた。

誰もが納得する事などほとんどない、なんてことはよく知っていたはずなのに。

その綻びを無視したことには後悔なんてしていない。

だけれども、僕はこの後に起きた事を一生胸に刻む事になる。

マロンさんに体を乗り出して裏拳で突っ込む。いや、突っ込もうとした。

いやいや。正確には突っ込んだと言うのが正しいのかもしれない。

ただし、本気で崖とは反対側にだが。

一瞬早く、彼女の体は銀の軌跡から逃れる。が、同時に僕の左腕には異物が食い込んだ。

「……っっ」

腕を斬られた。腕を斬らせた。

斬らせなければ死体が一つできていただろう。ただ、傷は深く、血は波打つように沸き上がる。

でも、僕の瞳はそんなものを映さない。敵を、投影するのみだ。

「なんで、こんな事をするのかな？」

予想外に乾いた口内からようやく振り絞った声は小さくか細い。だが、届いたようだ。

「……私はあなたが嫌いです」

城から救出し、今日ここまで供に逃げてきた少女は答えたのだから。

4・偽善だとは思いたくない

「……私はあなたが嫌いです」

短い青い髪。固く閉ざされた口。どこかをボー、と見つめているような虚ろな緑目。

身長は高くない。がその分、右手に握られた鋭利な安物のショートソードが長く見える。

斬られた左手からすでに異物は引き上げていた。

彼女は何かキャンプに置いてあった、僕のリュックを背負いながら剣を突きつける。

「何をするんですか！親友さん！」

マロンさんのその言葉に返している暇はない。

ゆっくりと、着実に、体を止めないように心掛けながら立ち上がる。ロッドはキャンプにおいてきてしまった。ポーチもまた同じく。

青髪はその立ち位置の圧倒的優位を誇っているのか、もしくは挑発しているのか。

とにかくつつ立ったまんまだ。

1秒が1日にも感じうる、ゆっくりとした時間を必死に耐え、ようやく立ち上がる。

「君は人のことを嫌いだから殺そうとするの？」

「……………」

「理由、を聞かせてもらえるかな」

油断なく構えながら移動する。

背水の陣と言う言葉みたいに背後に行けないわけではないし、後退

したらジ・エンドの場所は流石に無手では敵しすぎる。

相手の体がわずかに前に動く。月（みたいな）。大きさは地球で見える月の1・2倍くらい）が照らしてくれているので視界には問題がない。

一歩相手が進む事に少し後退。距離が詰まる。

「……よっ、と」

「……はっ！」

気合い一閃。目の前を銀の放物線が縦断する。……ん、踏み込みの歩幅的に

「よいしょ」

浅いのを見て、後ろへ全力ジャンプ。月に綺麗に照らされた軌道。元々僕がいたところを両断している。

あはは、これ決まったら死んでいたなあ。

……あのね。

余裕そうに解説しているけれど、内心生き延びる事に結構必死なんです。

文系少年ですし、何より2年間しか剣道にも携わらなかったし。

命の取り合いだってしたことないからね。

「……それだけの力しか持っていないのに何を偽善者ぶっているんですか」

「ん？」

「私は今日の貴方の行動の一連を見ていました」

「そりゃ、また」

趣味の悪い。しかも、偽善者、って言われている意味もわかるから
尚更気分も悪い。

青髪はジリジリと間合いをつめる。

「蛙を殺したのは必要があったから。蛇を噛まれるかもしれないリ
スクをおかしながら必要がないから殺さない」

「命の優先度がより高い人間を襲っているコボルドに対して窒息性
の毒を使わなかったり？」

「ええ。……私はあなたのそういう聖人ぶった態度が気に食わない」

僕もだよ。

口まででかかった言葉をグツと堪える。

建前で動物的になれない自分にホツとしながらも、本当に気に食わ
ないのは確かだから。

今日だって、どうせコボルドを殺さなければならぬ結果になるの
であれば、殺せばよかった。その手だてはいくつでもあった。

僕が必要とあれば、殺すことに躊躇いは感じない。その純然たる事
実がとても怖い。

だから、他の命を大切にしようとする。

そんな偽善者だから……反論はできない。

「……………」

「……親友、さん？」

「……………」

急に固まり、動きがなくなってしまった僕の事を心配したのかマロ
ンさんが声を出す。

でも、答えられない。

もしかしたら、僕は。僕の今日の昼間の決断は。

彼女に死をもたらしただけかもしれない事を再認識している最中なのだ

から。

気まずくて、何も言えない。

「……どうやら自分でも気付かれているようですね」

「そりゃあ、ね」

「……だとしたら、死んでください。私がこの事を過去の断罪とし、
今の決意にし、未来の推進力とするために」

4・偽善だとは思いたくない（後書き）

ちよつと文字が少ないような気がしますですが今回はこの辺で
嗚呼・・・顔文字を使いたい

5・一応解決を計ってみた

そこからは、一方的だった。素直に記載するのが嫌なくらいに攻撃される。

生憎だが、僕は無手で剣に勝てる程強いわけでもない。けれども、身体能力に劣る女性の太刀筋くらいはよめる。

勝つことには徹せず、負けないことに徹すれば1対1である限りは大丈夫。

ただ、剣筋は明らかに僕より速いので勝てはできないだろうけど。もつとも僕が一般的な男子高校生であり、相手も常識的能力の女子である以上、背を向けて逃走しても追い付けないだろう。

「……でもなあ」

この子がリュックを背負っている事実が逃げることを許さない。

何故、って？だって明らかにおかしいじゃん。

このタイミングで僕を殺そう、っていうのが。

そりゃあね。ム力ついたのはよくわかるよ。言葉から明らかだし、何より僕も自分や自分みたいな偽善者を本質的なところで嫌っているし。

かといって、本能に忠実過ぎる王様とかは論外だけど。

でも、今、ここで、マロンさんを狙ってから狙う意図がわからない。動きを阻害するリュックサックを背負ったままな理由もわからない。

他にも多くの不審な点がある。

そんな不審な点を抱えながら来た、ということが暗示していること。この子が起こそうと予想される行動とここに来た意味。

人間は大抵理由があつて動くのだ。動くのに打算や要求がつかない方が珍しい。

「止めて欲しい、か」

「……はあはあ、何か辞世の言葉でも言つたのですか？」

「少し話合わないか」

「……ええ、いいでしょう」

ただ、その後殺しますからね。

疲れたのだらう、青髪はショートソードを地面に突き立てて杖にしなから言う。

その目に映すのは狂気？それとも期待？

前者は多分ない。過激とはいえ理由が在るゆえ（理由をこじつけ過ぎてゐる勘はある）行動と説明がともなっている。

じゃあ――

「お前、王宮じいぐに戻つてあの王あくまの妾になる気だな」

「……ええ。そのつもりです」

強い意志で彼女は返す。迷いはない、とでも言いたいのであろうが、僕のところに来た時点で、ね。

過去に何度も経験のある出来事だ。

要するに彼女は、本当はそんな事を望んでいないのに、

「何故そんな決断を？」

「……私は生きたい。あなたじゃ他人を守れない」

生き延びるための最善の決断をして、

「じゃあ。僕を殺す理由は？」

「……ム力ついた」

「はあ？何が？」

「……私達を守れないであろうことが」

それがどこかで納得できなくて、挑発までして甘えてくる。

「つか、子供の我が儘に巻き込まれた。年齢、僕と同じくらいに見えるんだけど。」

唇をギュツ、と噛んで泣きそうになっている。

「……この子、本当に何歳だ？」

そして、僕は何歳の立場で語っている？

「だから、死んでください」

「……確認するけど、このままなかった事にしては」

「何を言っているんですか、親友さん！あなた、殺されかけているんですよ！」

説得していると、いつの間にか回復していたマロンさんが来る。

そして、青髪が杖変わりに使っていたショートソードを奪う。

「あつ……」

「行くなら勝手に行けばいいよ！でも、ボク達を巻き込む必要はない！」

「……」

「死にたくないのはボクだっておなじ！それなのに、君は生きたいと願う人の気持ちを踏みにじるの！？」

「………わ、私は！」

心の奥底では、青髪は自分がおかしい、ことに気付いているのだろう。

何かを堪えるように涙を流す。

「……私は！沈む泥船に悠長に座ってるようなことはもうしない！もう一度生を与えられたのだから！生きて、生きて、生きてやる！」

少し、引つ掛かる答だがまあ、いい。

そう言つて青髪は背を向けて駆け出す。

「あ……」

背中に向けてマロンさんは手を伸ばす。

今はまだ届かないであろう手を。

僕がどうするべきか。答えは幾重にも別れるけれど、

「人には命をかける価値があると思うんだ」

「親友、さん？」

せつかく、彼女が期待した盛大な台本おまわりに乗らない手はない。

男子高校生の全力で青髪を背中から地面に突き落とす。その上に、馬乗りになる。

「っ……何をっ」

「デメエ。黙って聞いていれば、よくも好き勝手ほざいてくれやがったな！」

襟を右手で締め上げるのを忘れない。

怖い顔をしているかは知らないが、それは重要じゃない。

今、大切なのは、この子の要求をちゃんと聞くこと。

「……だって、あんなんじゃ、守るべき対象を誤るようじゃ、いつか」

「だったら、証明すればいいだろ。俺が守れることを」

青髪は目を見開く。心の奥底で言わせたかった一言なのだろう。だって、そうとしかとれない安い挑発ばかりしてきたし。あとは、クエスト証明が簡単なのを祈るのみだ。

まあ、本心は多分王宮になんか戻りたくない、はず、かも、と考えられる、と思うし難易度は易しいのが来る筈だよね？

「……じゃあ、コボルドリーダーを倒すことで証明をお願いします」
「コボルドリーダー？」

「……コボルドがいる洞窟にいるはずですから」
「それって……強い？」

(○○○)

背中に冷や汗がべっとりと垂れる。口に張りつかせた、なけなしの笑顔も凍りつく。

リーダーと言う語感からして嫌な汗が止まらない。

そんな僕を安心させるように、青髪は爽やかな笑みで答えた。

「私より強いくらいですよ」

死ぬかもな。そう思うと同時に感じてしまった。

ああ。嗚呼。

この瞳を救うためならば。奴に似た瞳を偽善でも救えるのなら。命すら惜しくない、と。

5・一応解決を計ってみた（後書き）

また来週お会いできたら

6・ついつい思いだしてしまう

夢を見た。ずっと昔。中学3年生の頃の夢だ。

あの日。僕と彼女が初めて人として向かい合った、その翌日。手を取りあって、彼女にとって久しぶりの学校に行こうとした日の事だ。朝、前日に決めておいた場所に向かう。

朝の挨拶。おはよう。

もつと人と仲良くなりたい、と。僕の名前を呼びながら彼女ははにかみ、そう言った。

僕を知って、人を知り、悪意だけで人は存在するわけではないと知ったのだと。

だから、君以外の友達を作りたい。僕が一年間必死に追い続けた笑顔で呟く。

その眩しい顔は今でも頭に焼き付いている。この後、忘れてはいけない間違った選択肢を自分の感情で選んでしまったのだから。

彼女は僕に友達を紹介して、と言った。

別にそんなこと位、何でもない。僕は普通の男子中学生だし、仲の良くて気のいい男友達なら何人でも頭に浮かぶ。

でも、それじゃあ駄目だと思った。その時は何故かはわからないドス黒い感情が急に浮かんだ。

多分。今から省みると幼稚な嫉妬だったのだろう。片や毒物と読物、動物にしか興味がない平均的な文系少年。

もう一方は絶世の美少女。しかも、運動能力も抜群。

更に悪いことに僕のまわりには比較的能力の高い優良物件が揃っていた。

比べられ、初めて心を開かせたのに相手にされなくなったら嫌だった。

迷っていたはずなのに、気が付くと建前上、自分で作った友達以外深い関係にはなれない、という理由で断っていた。

彼女は少し困った残念そうな顔で頷く。
胸がズキン、と痛んだ。

彼女とは別のクラスだった。男が女々しく一々様子を見に行くのも尺だったので、友達に観察を依頼する。

初めの放課と次の放課。彼女は問題はなく溶け込んでいる、とニヤニヤされながら報告を受ける。

少し寂しく思いながらも、喜ぶ。まだ、彼女は壊れていないと確信できたから。

その後、彼女の担任に褒められたり、クラスのみんなに事情を聞かれたり。わりかしいい気分だった。

そう、いい気分だったのだ。実際、彼女をみてくれ、と依頼した友達は2回しか報告にこなかった、と言うのに。

自分のクラスでいつものように授業を受けること4回。

昼御飯を食べながら異変を感じたのは、扉の外に見慣れない学ランを来たガラの悪い、二人が立っていて、視線を送っていたからだ。

背筋が急激に凍る。何か説明できない嫌な感覚が宿る。
無性に奴に会いたくなって、教室を出る。ちらり横目で見ると高校生は携帯を取り出してどこかに連絡をとっていた。

マズイ。

まだ、裏をよむことに長けていなかった僕は感じることはできなかった。悪い感覚のみを。

だらり、汗が垂れ胸が苦しい。すぐるように見た教室には奴はおるか、頼れる友の姿もなかった。

最悪の予感が流れた。そして、当たった。

彼女は普段は鍵がかかっているで誰もよりつかない屋上にいた。下卑た笑いを浮かべる、近所の他校生に囲まれていた。

そいつらはたまに、中高一貫で、ちよつとした進学校であるこの高校に嫌がらせをしに来る連中だった。

頼れる友は追われ、僕に状況を伝えられていなかったのだ。

7人もの他校生。奴は囲まれながらもその内2人を気絶させ奮闘していた。

武道は昔から強かったのだ。

このまま行けば。奴一人なら逃げれたかもしれない。でも――

結果論から言って僕は人質にとられ、奴は全てを了承しかけ、

彼女に魔の手が迫るのが耐えられなかった。そんな僕が咄嗟に起こした、行動。

人類の夢の行為である——空を飛ぶ。

推定4階10Mの高さから。

落ちて、堕ちて、墜ちて——

「助かったんだよな……」

ゆっくりと夢の中から醒める。昨日、昔の奴の目と同じ目をした少女に襲われたからだろうか。久しぶりに地面とゴツンゴツンする映像とともに起きた。

昨日斬られた左腕が少し疼くが、魔法が使える世界にいた、というマロンさんの術のおかげで動作に支障はないみたいだ。

いや、すごいね、魔法って。疼くの前までは止められないみたいだけどさ。

そんな想いを抱きながら横に眠る少女をみると、思わず2年前の光景が甦り、

「君が何もなくて本当によかった」

そう、呟いてしまう。

………とはいえ。

途中、木に当たって衝撃が緩和されたために、僕は今と同じように左手を怪我しただけですんだんだけど。

当然全部幸せな結末だとまではいかなくて、あの日から奴の人間関係は止まったままだ。

僕を傷つけてしまった。そのことが楔となつて、今でも奴を締め付けている。

推測の域をでない。が、このことが奴に僕への恋心を感じさせているのではないだろうか。

僕は、そんな同情みたいな選ばれ方をされたくない。

負けてもいいなんていう戯れ言を吐く気にはなれないし、誰一人、例え親友にだって奴を触れさせたくない。

けれども、もし、この世に幸せがあるとすれば――

奴が奴自身で選んだ人と道を歩むことだと思う。

あの時、僕が奴の頼みを聞いて、行動していれば。

奴が他校生に絡まれる前に紹介しておけば。

ずっと悔やみ続けている。

でも――

「僕が好きな女の子に手を出さない最大の理由、って別のところにあるんだよね……」

奴の感情、というのも勿論大きな理由だ。お互いに同情なんかで関

係を築きたくない。
お互いに。

「自分の感情すら満足に理解できないもんな」

そして、僕は結論の出せない自分が嫌いである。

……考えるの終了！

すやすやと毛布で眠る奴の頬をツンツンしてみる。もっちりとした瑞々しい肌は攻撃を全部受け止めてくれる。

それ以上やると更に踏み込んでしまいそうなのでやらない。
毛布に奴だけ残して、朝靄のかかる中、伸びをする。

「おお、勇者。早いな」

声をかけてきたのは廢王子。丁度よかった。

「少し話をしないか？」

7・吹っ切ることはできないけれど

朝日を受ける早朝の森。僕は昨日青髪に襲われたその場所で東向きに立っていた。

眩しい光に黒く写し出されている廃王子とともに。

「……勇者はアホか？ 勇気と無謀は違うのだぞ？ しかも、確実に追っ手は来ているからな」

(^m^;) あはは。

事の顛末及び、コボルドリーダーを倒しに行くため別行動をとることを伝えた時の廃王子の反応である。

コボルドの上位種というか名前の通りコボルドの小さな部落の産まれながらの統一者。

いわば女王バチみたいなポジションに君臨する、他のコボルドとは構造から違う生き物らしい。

……勝てるのかなあ、僕(・ー・;))

あの強情な青髪はこうしないと本心（だと本人は思っている）にしたがって王城に行ってしまうといえ、今から尻込みしてしまいそうな情報である。

「……まあ、それでこそ勇者なのかも知れないが」

「あー、うーん」

というか、コボルドという生物実は結構強い。

足こそ人間の方が速いから、殺された旅人はほとんど聞かないらし

いが、3匹対1人だったら逃げることを推奨される。

でも――

「人間、つてさ。行動するより行動しなかったことに関して後悔するらしいんだよね」

程度は違えど、僕は行動しなかった。その結果として奴を独占しているのだ。

決して今の奴を否定するわけではないのだが、今、僕は結構、昔の行動に後悔している。

「……勇者は何かを後悔しているのか？」

「まあね。もっと上手い方法を今も模索している」

「金髪少女のことか？」

「……………」

よくわかるな、と思う。

「わからないが、下の方のことか？」

「……………」

○（＾・＾）○ズッガン

あれえ？僕ってこんなに力があつたんだ。

瞬時にロッドを近くの木に叩きつけてみるとあら不思議。木にロッドが食い込みました。

養分が多分足りてないんじゃないかな。

「……………まあ、それはおいておいてだ」

(. .)

「……ボケだから許してくれ」

(. . .)

「……わかった。で、なんだ」

「あの娘は君といるだけで、とても幸せそうだ」

(. . | . .)

だから、問題なんだ、と思う。彼女は僕以外の人間を知らない。
だから、僕は彼女が他の人をちゃんと見て選んでくれるまで答えな
い。

でも、そんなことより——身勝手で情けないことがある。

「だから、君も人に必要以上の責任を感じようとするな」

「でも……」

「少なくとも、それは相手を侮辱しているのと同じ行為だぞ。言っ
てはいけないかも知れないが自分の責任は自分の責任だ」

わかっている。

この気持ちは、同情、なのだろう。そして、真に僕が恐れているこ
とは

僕の恋は偽物ではないかということ。

僕が同情をそうとらえているだけかもしれないということ。

その真実は“自分”と言う人物を本当に殺したくさせる。

実際、結構死ぬ気だ。

僕が死んだら、奴は公平な視点から誰もを見れる。青髪は意地を張らず、自分の真の気持ちに気付いてくれる。

「勇者」

廃王子が呼び掛ける。僕はその目を直視出来ない。

朝の日差しが眩しいのに目は廃王子の後ろから刺してくる陽光をとらえ続ける。

「安心しろ」

「こんな偽物だらけの勇者に何を安心しろ、っていうんだよ」

「もし、自分の気持ち嘘っぱちだとか虚像だとか思ってたんなら、それの方がまやかしかだ」

(; | ;)

あれ、なんだこれ。

いつしか、自然に僕の頬には涙がつたっていた。安堵、ともちよつと違う複雑な感情。

あれ、なんだこれ。僕はただ地面に崩れ落ちて泣き続ける。

全身に力が湧かない。体が産まれたての小鹿のように震える。疲労が身体中を覆い尽くす。

でも、不思議と悪い気はしない。

あれ、なんだこれ。

「第一、嘘で恋している奴はこんな反応できない」

「……僕は、本当に瑠奈に同情で感情を抱いていないのか？」

「んなこたあ、俺にもわからん」

廃王子は一文字一文字をはっきりと区切り、告げる。紡ぐ。

「ただ、例え初めは同情だとしても、それから始まる愛もあるさ」

(> <) 。 。 (> <) 。 。 (ノー >)

ようやく、涙が収まってくる。

それと、同時に隠せない想いが溢れてくる。僕は、そう。ただ単に

……

「まだ、認めきれていなかったんだなあ」

奴が好きだということを。

いや。奴に恋をしていい、ということ。別にこの事がわかったからと言って、今からの話に何も関係ないのだけれど。

少なくともこの想いを抱え前を向いて進もう。そんな気分には十分になった。

「これで、少しは生きたいという気分になったか？」

「気付いていたのか？」

「さあね。予想はしていたけど。伊達に勇者より長く生きていないさ」

思えば、異世界に来たのは神が与えてくれたチャンスなのかもしれない。

もう一度、奴が人間関係を取り戻し、僕が自分の感情を見つめ直す。

「とにかく、また魔法で連絡を取り合おう」

「ああ……って僕は魔法を使えないんだが」

「そこら辺はなんとかするから、大丈夫だ。追っ手に見つかるなよ」

なら、よし。

一回頷く。廢王子に背を向ける。

ロッドと荷物の準備は完了。奴への置き手紙（リュックに入っていた紙と鉛筆を使用）もちゃんと準備してある。

（．．．）

……本当に面倒なことになるのはごめんだから、ついてこないでね。

「親友さん」

「……………」

そんなことをしていると、いつの間にか準備の整ったらしい青髪とマロンさんが来る。

準備はばっちりだ。そう、準備は……

「あの～マロンさん？」

「ボクもついて行きますからね」

「大変危ない死地に赴こうとしているのですが」

「放っておけないですよ」

（．．．）g

まあ、昨日コボルドにビビって泣いていた娘がよく言うよ、とは思
う。が、回復魔法は大得意らしいから保険にはなるか。

青髪をじっ、と見る。

「……私は監視だから」

「せめてマロンさんは守れよ？」

「……確かにあなた以外の命は大事」

「うわあ。ひど。マロンさんも危なくなったら迷わず逃げてね」

「はい！その代わり怪我をしたら遠慮なくどうぞ」

「ありがとう、助かる」

そんなわけで勇者分隊はコボルドリーダーを倒すため、勇ましく駆けっていくのであった。

8・エロと微エロの違いに関して

途中、兎程度の小動物をやり過ごしながら、2時間程歩いて昨日の水場に辿り着く。

「……ここからコボルドの住処に行く」

「わかっている」

大抵の旅人は水場の近くにはキャンプを張らない。生物が集まって来る場所だからだ。

水は原初の昔から生き物にとって不可欠であるがゆえ、コボルドのような肉食獣は（雑食かもしれん）ここで待ち伏せることが多々ある。

そんないい加減な推測によるものだ。

まあ、どちらにせよ川岸に集落か井戸でもつくっていない限りはどうしても水を汲みに来る必要がある。

だから、昨日見つけた場所を狩り場として以外にも使用しているんじゃないかなあ。

とりあえず、見つからないように木の上に隠れることを決定。荷物を隠して、各々が登りやすい枝を選んで慎重に登っていく。

「あ……」

重量を考えて、違う木に登っていると隣の木から息を飲むようなマロンさんの声が。次の枝によじ登りながら横目で状況を確認する。

「どうした？……って」

恐慌警報発令中。

後ろから見える茶髪は逆立っていました。何かに怯えるように震えています。多分毛虫か蛇。次点は蜘蛛。

あ、落ちそう。まあ、2Mくらいだから死なないとは思っけど念のため――

ヒョイ、と登りかけていた木から足から落ちる。膝を柔らかくクッションにして着地。

そして、

「……させません」

「あたたたた?!」

>>o(<―>)o<<

救出に行こうとしたら、青髪に流れるような動作で関節を決められた。

「何をするの?!」

「……右手の骨を折……、もとい骨折をさせようとしているのですが?」

「言い方が悪かった!何故そんなことをするの?」

「……二度なし効果という奴です」

(^ ^;)。。。

えーと?どうということだろう。

「……この作品は微エロコメであってエロコメではないのです。一章の間にメインでもない人とのエロハプニングが同じ状況であるのは許せないのです」

「とりあえず拘りはわかった。だから、早く救出しに行こう」

マロンさんを支える枝はしなりになつて風前の灯火だ。本人も震えて動けないし、十中八九落ちる。

「……とにかく貴方が行つては駄目です。常に読者の予想を蛇行しなければ」

「読者としては今のテンションという変化球に見逃しの三振をきつしていると思うよ！」

決して打ちにいかうとすらないだろうね！

「……なんですか、読者って。はっ、自分が主人公気取りですか。笑止」

「正論だが今、君に言われるのは凄くムカつく」

「……全く、展開がエロにしかもっていけないからって、これは行数稼ぎが甚だしいですね」

全くもってその通りだ。現に右手に折れるような痛みがあるのに普通に喋っているもんな、僕。

本当に前回までのシリアスさはどこに失われた。

ようやく解放された右手を労り、青髪を睨み付ける。青髪は視線を受け流して無表情のままマロンさんのいる木の下へ。

……………あれ？

「少し笑ったのか？」

青髪の口角がほんの少しだけつり上がるのが見えたような気がする。まあ、気のせいだろうが。

「きゃあー!!」

枝が折れ、マロンさんが青髪の上に落ちる。お互いの手足が絡み合いくんずほぐれずの状態が形成される。

【これは微エロコメだ。その事を忘れるでないぞ!】

なんか神様、つばい声が聞こえた。本当に前回までの面影が消えてやがる。

とにかく、服やなんかはだけている女の子を見ているのは何か気が引けたので、昨日殺したコボルドを置いた辺りを見てみる。

「……………っ!」

おかしい。何かがおかしい。

死体がないとかそういうわけじゃない。しわくちゃん犬の顔と小学生と同じくらいの大きさの胴体、らしきものはそこに転がっていた。詳しい内容は省略する。

だけれども。まるで、狂った殺人犯が行ったような凶行を目の当たりにしてしまう。

あたかも。その残骸すらこの世に残ることを拒否されたかのように木端微塵にされた肉片。

近付きながら、それを見て僕は、なぜ理性を保っていたのか、今ですらわからない。

「……………どうかし」

「来るなっ!」

周りに血は飛び交っていない。殺めたのは大体26時間前。

血の固まる早さまではわからないが、その1日を少し越える時間の中でこのようなことをした生き物が存在する。

そう。

「食べるためでもなく、楽しむために死体を辱しめるような……」

「親友さん？」

「座ったまま動くな！」

痛そうに腰の辺りをさするマロンさんに指示。これは女の子には見せられるものではない。

その生き物の特徴を少しでも掴まなければ、と思い辺りを見渡す。すると、視界の隅に何かが映った。

「……なんだ？」

試験管から用心のため油性の液体を少しだけ仕込み杖に仕込む。透明の揮発性の液体。

2・2―ジクロロジエチルスルフィド。イペリット。またの名をマスタートガス。

第一次世界対戦で使われたこの毒ガスの威力は恐ろしい。だが、現在では抗がん剤として生まれ変わっている。

毒を仕込んだロッドとポーチを用意して、慎重に近づく。

鼻の奥につーん、とした感じがこびりついてくる。嫌な予感しかない。

「……変ですね」

いつの間にか後ろに来ていた青髪に声をかけられる。振り向かず、警戒しながら前進を続け、それに応える。

「座っていると云ったはずだが？」

「……気遣いは無用です。それより、あの死体は異常です」

「わかっている。だから、マロンさんについていて」

「……ならいいです」

遠ざかっていく青髪の足音。

さっきの青髪が言ったそれが示すこと。もしかしたら、狡猾で残忍な人間がこの近くに潜んでいるかもしれない、ということだ。次点は狂った人間。

動物はこのような自分に無益なことは、しない。

近付くことに匂いは酷くなっていき、地面が赤く滑るようになっていった。

「……大量虐殺でも行われたのか？」

滑る、滑る。だが、それだけで赤く染められた小石と服以外は見えない……？

かがみこんで、血で赤く染められた黒い見覚えのある服を手取る。

確か、王宮で侍従達の着ていた服だ。メイド服のように黒い下地に白かったフリルがついている。

所々に穴が空いていた。血を吸って重い。

グニヤリ、と中に入っていた何かが服の穴から滑り落ち、ベチャリと地面に張り付く。カサカサとゴキブリが這い出てくる。

そばには立派な剣が落ちていた。

そばにはコボルドが使っていたらしい血塗れのスパイクが落ちてい

た。

そばには白の中に2色入った小石が入っていた。

「……じ、地獄？」

何かを潰すような音を後ろに聞く。振り返ると赤く血走った目をした緑色のモンスターがいた。

反射的にロッドを振り回し、“霧吹^{ミスト}”。

木製の棍棒を装備したゴブリン、というファンタジーの住人数人は一撃で地に伏す。

だが、いつの間にかその後ろには大量のモンスターが控えていた。

「……マジかよ」

逃げ道は後ろにしかない。でも、どう見ても罠だろ、この状況。

……仕方ない。多勢に無勢である。殺しもやむなしだ。

ポーチの中を一さらいする。右から3つ。恐らく世界最高の威力を持つ毒達。作成した後も厳重に保管している上、威力を詳しく調べてからは実験することすらしていない気体。

力がないことを自覚している僕が自衛のために作った毒。

結局捨てる程の勇氣もなく、この3つだけは梱包材で包み、鍵までかけてある。

使おうか、と考えてやめる。自分も危なくなる、というのもあるし、何より使ったあとの惨状を見るのが耐えられないだろうから。

そうになると、やはり他の毒か……。その上、屋外なので気体以外が望ましい。

河豚毒、キノコ毒、あとは青酸、蛇毒。

前者3つは即効性ではない。吸収から効果が表れるのに20分はかかる。

よし！

クレオパトラを殺したと言われているエジプトコブラの毒を選択。持っている神経毒の中ではがらがら蛇の毒に次いで強い。

尚、豆知識。蛇毒はタンパク毒。だから、胃の中では消化して無毒にできるらしい。

もともと、この場合は霧状にして肺に吸収させているだけだから関係ないけれど！！

「だからと言って生で毒蛇を食べるのは大変危険です。また、某小説のように頭を食べなくても、蛇の体内にも自分の毒腺から染み出た毒が入っているので、必ず加熱してから食べましょう。」

ポーチの中を見て、その生物毒を取り出す。そして、滑らかにロツドに仕込もうとした時、僕は固まってしまった。

「……………なっ？！嘘だろ……………！」

新手が襲ってくるのに身構えていた僕の目の前。毒に倒れた仲間のゴブリンを。

モンスター達はまるで豚を挽き肉にするように。

血を辺りに飛ばし、散らしながら。

原形も残らないほどに叩き始めた。

9・ひき肉にはされたくない

信じられない光景。しかし、それは現実に目の前で進んでいた。狂ったように仲間だったものの残骸にモンスター達は武器をふりおろす。

「……………キキィー！」

時おり自分の体を掻きむしる。興奮の度合いが段違いだ。何かの症状に似ている。何かを摂取した時の症状に。だけど、状況が敵が考えることを許さない。

「……………図られましたね」

「……………あうう」

「青髪！……………マロンさん」

気が付くと近くに二人の姿が。あー、もうばか野郎。が、後を続々とついてくる槍を持つモンスター、それから服が損傷している青髪と固まって動けないマロンさんを見て、理解する。どうやら、余分な事を考えている間はないらしい。

完全にはめられたか……………

「……………どうやら、こちら辺のモンスターが共闘しているようですね」
「共闘しているにはおかしな点がいくつかある、つがな」

飛んでくる棍棒や槍に青髪もショートソードで応戦。攻撃は直線的で早いが芸はない。

弾く、弾く、弾く。

僕はその隙を狙って“霧吹”^{ミスト}を連射。狙いたがわず全て当たり、動きが鈍くなる。それを一々、後にいるモンスター達は肉塊に変えていく。

そのお陰で一人お荷物がいても、後ろに庇いながら生きていられるが――

「……っ、多い！」

捌いても、捌いても追い付く気がしない。間違いなく視認できるだけで400匹はいる。

前には逃げられない。

こうなると、こちらが死ぬのは時間の問題になってしまう。罾だとわかってても後ろに行く以外は。

ポーチの中を一瞥。一瞬でも目眩ましになれば問題ない。

爆発？しかし、死を恐れずに突っ込んでくる敵に意味があるのか？当然高校生が扱える程度の危険な薬品からは、そこまで威力があるものは作れないし……

考えるまもない追撃、追撃。マロンさんを庇いながらも応戦する僕達。

「ちゅい！」

「……っうあ！」

気を少し抜いた瞬間、左腕に槍が突き刺さる。木を鋭利に削っただ

けの粗末得物だが、殺傷能力がないわけがない。

何とか抜いたものの辺りに血が、僕の血が飛び散り他の血と混ざりあう。

でも、守るため、帰るためには休んではいられない。右手一本でロッドを振るう。

「……あ……」

バランスを崩す。頭が重力に手招かれるのを切に感じる。

右手だけになった。足場が悪い。棍棒が飛んできた。

言い訳をしようと思えば、軽く10は思い付く。だが、倒れゆく僕の中でゆっくりと感じる世界は止まってくれるわけではない。

青髪が全ての防御、攻撃を無視して、手を伸ばす。ゴブリンのうちの一体がその間に割り込み、青髪の進路を阻む。

必死に起き上がろうと後ろに手を伸ばす。でも、焦った手は滑り更に体勢を崩す。

ロッドは手放してしまった。左腕の傷口は汚物にまみれ、激痛を催す。

……やられた

振り上げられるゴブリンの木の棒は頂点まで溜められ、動かない僕の体を狙います。

衝撃に備え、体を固くする。どんな状況だって負けられないし、勝負は終わっていないのだ。

「し、親友さん?!」

マロンさんが声をあげる。でも、返すことはない。

歯を食い縛り、追撃に耐える。

例え、100%勝ち目のない戦いだとしても、負けられない。だって、僕には帰るべき場所があるのだから。

人が奇跡を起こすことがあるなら、それは精神に依存するものだと思うから。気持ちだけは――

体が、足が思うように動かない。唯一動いた右腕も碎かれる。

群がるゴブリンやオークの首を斬り落しながら、青髪は手を伸ばす。叫ぶ。

「……だ、駄目えー！お兄ちゃん！」

「し、親友さん！」

二人の声をBGMに僕は保ちたかった意識を失った。失ってしまった。

幕間・想いと思い

side ???

物心ついた時から私は旅をしていた。黒い髪を持つ、孤児だった私を拾ってくれた心優しいお兄ちゃんと一緒に。

お兄ちゃん、と言っても実はそこまで年は近くない。15才くらいは違ったと思う。

でも、お父さんと呼んだら怒られた。

俺の子供みたいじゃないか、って。

今から考えると冗談半分だったんだろうな、って思えるけれど、その当時は怖くって、それからはお兄ちゃんと呼び続けた。

お兄ちゃんは私の元々いた世界の誰かに仕えていた。

そして、その指令を受けては私を伴って、任務を遂行しに行った。

任務は大抵、人助けだった。人を襲う物をどんな形でもいいから排除して、救う。それだけの任務。

殺す。考えもなく殲滅させる。

簡単にそんなことぐらいはできる能力をお兄ちゃんは持っていた。でも、無闇にその力を使いはいしなかった。

「所詮、偽善なんだけどよ」

なんて言いながら、いつも殺さないですむ、と判断すると敵を五体満足のまま放置する。それ以上の追い討ちをかけない。

中にはその場で襲いかかってくる人もいたが、無力化をするだけ。

絶対に殺さなかった。

周りにそんな人は他にいなかったし、そんなお兄ちゃんはとても格好よく、私の誇りの一つだった。

だけど、だけれども。

あの日。お兄ちゃんがようやく幸せを手に入れて、私もお義姉ちゃんと仲良く暮らしていた時。

今までお情けで生かしておいたモンスターが、賊がお兄ちゃんを出せ、と村を襲ってきた。

私は激怒した。村も村人も激怒した。

激怒しなかったのはお兄ちゃんだけ。

いつの間にか、無言で寄合の席を立っていた。家にも帰って来なかった。

結果論から言ってしまうえば、お兄ちゃんの死体は次の日見つかった。晒されたと言った方が正解だろうか。

お兄ちゃんも賊のところに単身武器も持たずに行ったのだ。賊がそれ以上、村に侵攻してこなかったことを考えると何らかの契約か誓約をさせて。

何日か放心の状態で過ごした後、私は机の中に残された私宛の手紙に気が付いた。

“アオイへ”

青い髪が特徴的だったから、とお兄ちゃんが私にくれた名前。
涙腺がゆるみ涙が溢れる。

最後の手紙を一文一文、字噛みしめるように読んでいく。

内容は私の出生だった。

私はどうやらお兄ちゃんが始末した人の娘だったらしい。

そして、許せないことが書いてあった。お兄ちゃんではなく私がだ。
そんな意図はなかったのだろう。でも、私を拾った、その日から強く人を殺したくないと思うようになったというのだ。

私が。私が大好きなお兄ちゃんを殺したかもしれない。知ってしまったと、じつとはしていられなかった。

自分が嫌になり、お兄ちゃんを嫌いになり、世界が嫌いになった。

名前を捨てる。それが、まず初めの決意。

お兄ちゃんを殺した賊を殲滅する。それが、その次の決意。
死ぬまで放浪する。それが、最後の決意。

この世界に来る前に見た、最後の光景は剣が自分のお腹に刺さる、
何でもない死の一場面だった。

ああ、自分は2つ目の決意は達成できなかったのかと悟る。

もう、どうでもいいや。そう思ってたがままにされていた。

あの男の偽善を見るまでは。

あの男はお兄ちゃんより数段弱い。まともに打ち合ったら私よりも

弱いだろう。

身体能力も私が見てきた男の中では下から数えた方が早い。

そんな男が偽善を行っていた。お兄ちゃんと同じことを行うとしていた。

あの強かったお兄ちゃんよりもずっとずっと弱いのに。

モヤモヤして、気になって。こんな気持ちになるなら、ここにはいたくないと思って。王宮で無気力にボー、としている方が楽だと思った。

何かがおかしかった。でも、あんな奴の側にいて死ぬのは、まっぴらごめんなんだと思い聞かせた。死ぬなんて可能性も示唆されていないのに。

こっそりとリュックというものを見まねで背負って来た道を戻る。その途中。ふっ、と考え付いたことがあった。

気が付くと、剣を持っていた。一思いに刺してしまおうと思ったけど、隣に女がいた。ちょうどいい。ちょっとした試験にはうってつけだ。

気が付くと、また私は誰かを殺そうとしていた。今度は直接的に。あと3歩。それだけ進めば救えるかもしれないのに。男の命は酷く叩かれ散らされようとしていた。

ようやく目覚める。

ああ。私は。私はただ——甘えたかったんだな、と。すがりたかったんだな、と。私は馬鹿だ。

私が殺すのに、見ていることしか、結局できない。でも、でも——

「……だ、駄目えー！お兄ちゃん！」

納得、出来ないよ。

今回も悪いのは私なのに。だから、死ぬのも私だけで十分なのに。
あの人は多分、事情も知らずに私の我が儘を受け入れてくれただけ
なのに。

なのに、なのに――

side マロン

ボクは臆病だ。

生まれつき物凄く臆病だった。
人に対してではない。動物、主にモンスターに対してだ。

近所のワルガキに混じって遊ぶことはできても、それに混じって狩
りには行けない。

モンスターを見た瞬間に震え、動けなくなってしまう。狩りには本
当に役にたたない。悔しい。攻撃魔法だって使えない訳じゃないの
に。

幸いにも、治癒魔法がつかえたので、癒師になることが出来たから
よかった。が、一体でしなかつたら、何をして生きなければならな
かったのだろう。

まあ、それ以上、別に特筆するような人生は送っていなかったと思
う。

あの世界で普通に生きて、村にモンスターが来て、最後は崖から落ちて死んだらしいこと以外は何も。

それから、もう一度生を得たボクはとても嫌な状況に陥っていた。

欲望の捌け口にされるために召喚されたそうだ。本当に最悪な気分だった。

生をもう一度得られても、これは……地獄となんらかわりのない。

だから、解放された時は本当に嬉しかった。4日間急かされ続け、お互いに誰が誰かを知る暇すらなかったけど、簡単に耐えられた。

生きていることに喜び、自由に感謝。

その日の朝もそんな気分で水浴びをしていた。

途中、殺氣みたいなものを感じたけれど、何も思わずに。

いつの間にか囲まれていた。四方八方、余すところなく、モンスターに。

地面にへたりこむ。体が動かなくなる。何も考えられない。

また、殺される。苦しい。苦しい。

ただ、苦しい。

暫くそうしていたら、目の前からモンスターが消えていた。安堵。でも、まだ不安は消えない。そのまま座り尽くす。

すぎるものも、何もないこの世界で不安を対処する方法なんてしら

ない。どうしていいかもわからない。

そのまま目の前のものに抱きつき続ける。まだ、怖かった。

助けてくれたその人は落ち着くまで醜態を咎めないでおいでくれた。それが救いではあるけど、なんとという醜態を曝したものだ。

二度とこんな事にはなりたくない。それと同時に思う。

ボクの力をこの人のために使いたい、と。

いや。正確にはこの人とともにならモンスターとでも闘えるかもしれない、と。

何故かそう感じた。

なのに。

「し、親友さん？」

今、ボクは何をしている？

助けてくれた、この人となら闘える、と思った人が死にかけているのに動けすらない。

ただ、固まって、血でベタベタな地面に座って——足を引っ張っているだけじゃないか。

動かなければ何も変わらないというのに。ボクは動けない。

今、あの人は、ボクのことを責めようとせず、死に着実に向かっている。

肉を穿たれ、骨を砕かれ、命を削られている。

でも、今なら間に合う。

心臓がドクン、と波打つ。

そうだ。今ならまだ間に合う。

怖くても、苦しくても。最初の一步を踏み出そう。まだ、間に合うのだから。

この世界に來た時、唯一ボクが持っていたもの。茶色の杖。

多く村人の命を助け、何度も死を見送ったことのある杖。

震える手で握りしめ、前に出す。

嗚呼。簡単じゃないか。

後は目を瞑って、精神を制御して――

「……だ、駄目えー！お兄ちゃん！」

薄目をあけると、青髪さんが周りのモンスターを斬りまわしながら、必死に駆けてくる。

自分より取り乱している人を見ると、何故か少し落ち着く。

――風。大いなる風。太古よりそなたを使役する一族が告ぐ。

「親友さん！」

呼応の完了。目標を設定。

――薙げ。

疾る風がボクを追い越した時、確かな感覚が宿った。

裏章 1. “心開放”

「……まだ、だな」

僕はこの世界ではない、生まれ育った世界から持ってきた双眼鏡で弟達を覗く。

隠蔽を自分達にかけているのに茂みで伏せているのは念のためだ。

「いいのか？」

「何が？」

「弟が死ぬのかも知れないのだぞ？」

隣で同じ姿勢で尋ねてくるのは黒を纏った男。金色の髪を腰まで足らし、澄んだ青色の髪をしている。

そして、口元には笑みが。悪戯で嫌な笑みが張り付いていた。

僕は男が暗に問いかけていることに気付き横目で見ろ。

「別に弟に死んでもらいたいとは思ってねーよ」

「ククク……我の一言で思い至るとはよっぽど後ろめたいのだな」

「……………うっせ」

死んで貰いたくて見守っている訳ではない。この男がいるのは偶然だが、僕がここに居るのは必然だ。

ずっと、それこそ夜も寝ない覚悟でやって来ているのだから。

嫉妬。羨望。それらが混じっていないとは言えないが、それよりも罪悪感が強い。

これは本当は僕がやるべき仕事だったのに。

「それで、君の弟は本当に持っているのか？」

「多分ね。……出来損ないの僕とは違って」

「ククク……出来損ないだと？」

そう。僕は持っていない。

持てなかった。遺伝しなかった。だから、僕ではできない。

隣に座る男と、この世界で元々勇者であった親父が交わした密約に反している。

マインド・リリーヌンフインシユド

“心解除 未完成”。

人を含めた動物の心にかけられた鍵を解除する事のできる、その能力を持ち、なおかつ、この世界の真実を自分で知れるものでなければ。

マインド・リリーヌンフインナル

“心解除 完成形”を持っていた親父はこの世界の真実を知る前に暴れすぎたし、僕は“心解除 不完全”すら手に入れることが出来なかった。

だから、この世界を救えるのは弟しかいないのだ。真実も、目的も。教えられてしまった僕は、救えない。

「しかし、本当に持っているのだろうか？」

「持っているさ」

でないと引き受けさせたりしない。

再び、双眼鏡を覗きこむ。

そこで、展開された状況に思わず微笑んでしまう。

青い髪を持つ勇者候補と茶色の髪を持つ勇者候補は闘っていた。特に茶色の髪の方はさつきまでは闘えていなかったのだから、大きな進歩と言えるだろう。

風が薙ぐ。剣が舞う。弟を囲んでいたモンスター達が押し戻される。だけど、あれじゃあ、もう持たないな。そろそろ潮時か。

「行くぞ」

隣の気高い金色の男に声をかける。遠視とつみで同じように光景を見ている男が頷く。

「ああ。形式は？」

「術者まで全滅。あそこの収集をつけてから強襲しよう」

「……わかった」

本当なら弟に辿り着きくらいしてもらいたかったが、まあ、目論見などそう上手くは嵌まらない。

この事態自体がイレギュラーなのだから、弟の能力の一端を見れただけ僥倖ようへいこうだ。

飛ぶ。風に乗る。両手を前に。

術式を展開する。

——焰。灼熱の紅き光。人類に繁栄を約束した協力者に告ぐ。

目標を設定。範囲を限定。

——舞え。

威力を最大値に固定。眼前に巨大な火柱が立つ。

「ククク……出来損ないとは誰のことだ？」

「例え、類稀なる魔法適性を持つていたとしても必要がなけりやあ出来損ない、っさ！」

魔力操作で風を送るのを忘れない。僕と隣のこいつはともかく、焰柱の裏にいる勇者様ご一行は酸素がなければ死んでしまうだろうから。

金色の男は笑いながら炎の方へ歩み出す。

「少なくとも君は価値ある人間だ。我等の理想とは違った形の、な」

「どーも。で、助太刀はいるか？」

「無用だ。ただの三下、我の手で十分だ」

片手を挙げ、炎の中へと消える。まあ、あそこまで言うなら大丈夫だろう。

10秒間くらい燃え上がった焰柱はすぐに焼け切れ、後にはゴブリンだったものとコボルドだったものの、要するにモンスターだったものが残った。

「……あなたは何者ですか？」

全滅したモンスター達の向こうにさっきまで観察していた少女2人と倒れている弟が現れる。

ただ、まだ、明確な答えと素性を言うわけにはいかない。仕方ないのではぐらかすことにする。

「君たちの仲間の心配はいいのかい？」

倒れている不肖の弟を指すことによって。

「あつ、そうでした！」

「……茶髪さん」

「マロンです！青髪さん」

「……マロンさん。とりあえずここを離れましょう」

青髪は抜いたショートソードで僕を警戒しながら弟の上半身を持つ。そして、一礼をして下半身をもった茶髪を伴い行ってしまった。

僕は彼等とは逆にあいつが消えていった方へ歩き出す。数十メートル進んだところの決着は、もうすでについていた。

敵らしい、エルフ的な風貌をもつ混ざり者は、あいつの剣を喉元に突き付けられ、動けなくなっていた。

側には斬られた大きな樹。今回のモンスター達の暴走の元、コカノキだ。あちらの世界にもあった。

コカインは覚醒剤と同じような症状を起こす麻薬だ。この女はその毒性を使って、本能のままに争いを起こさせようとしたのだろう。

この世界の神の本能のままに。

「で、肉塊に一々変えていったのは表面積を大きくして早く分解させ、樹の栄養にかえようとしたからか？」

「……そうだ」

女エルフはあいつの問答に淀みなく答えていく。

まあ、そんなものを一々書いていったってつまらないから纏めると、樹の葉を食わせてコカインの中毒性を利用して操る。その際の魔力はコカインの樹に依存しているから、補うために操っている者すら栄養に変えていったらしい。

途中からあまりにも問答がつまらなくなったので、コカインの樹をじわりじわりと燃やして遊んだり、臭いを封じ込めていた結界を破って換気したりしていてあまり聞いていなかったが、大まかにはこんな感じだろう。

「おい、終わったぞ」

あいつが低い声で僕に声をかけてくる。終わったのか。じゃあ、弟の様子も気になるし――

「じゃあ、僕は行くな」

「ああ。始末は任せろ」

最後に一度女を見る。

黒い瞳に、雪膚。髪は緑。汚いボロで体を纏っている。エルフラしい中々の美貌を持っているが、頬が痩けてみすばらし――

ぐうう

.....いや。

何と言うか、貧相も貧相。何日間、食べていないんだって感じた。

目だけは気丈に光っているけれど、虚ろだし。多分頭がフラフラしているのは

ぐうぐう

血糖値が足りないせいだろ、てか飯くらいちゃんと食べ、それより何日寝てないんだよ、なんだその目隈が色濃く。

イライライライライライライライライライライ
イライライライライライライライライライライ
イライライライライライライライライライライ
イライライライ

「どうした？……なんか怖いぞ？」

「いや、
気が変わった」

エルフの縄をほつきながら、そう告げる。あいつはハッ、と一度笑う。

「流石は兄弟といったところか？」

「勘違いするな。こいつの命は僕が奪う」

あいつは鼻を鳴らす。それから指を鳴らす。首輪が、主従契約を結ばせる首輪が、エルフの細い首についた。

「位置を知らせる能力がついている。有効に使え」

「恩に着る」

「奴隸だからといって、主人を殺せないわけではない。精々命を奪われないうにな」

「ああ」

10・一件落着？

目覚めると満天の星空だった。都会じゃきつと見るこのできない、いや、昔いた世界では見ることの出来ないほどの。

「……ここは？」

意識を失う前。最後に見た光景。群がるモンスターが飛んでいき、悲鳴と怒号。そして、辺り一面が灼熱に包まれたような記憶があるのみだ。

動かぬはず左手を頭に持っていく。

「生きている……」

何が起ったかはさっぱりだ。気がかりもいくつかある。でも、

「生き残れた、みたいだな……」

ほっ、と一息をつく。途端に落ちかける意識。かろうじて保ちながら痛い首を動かし、横を向く。

「……気が付かれた様子ですね？」

「大丈夫ですか？親友さん」

焚き火があつて、火の側には黄色く照らされたマロンさんと青髪の姿があった。

時たま小枝を火にくべながら、安堵の笑みを浮かべている。

二人とも無事か……本当によかった。

暫しの間流れる暖かな沈黙。それを不意に青髪が破った。

どこで習ったのか正座をして、地面に擦り付けるかのように頭を下げる。

「……すみませんでした」

「いやいや。謝るのは僕、でしょ？」

「……いえ。私の我が儘でおきてしまったことですし、どんな罰でもお受けいたします」

(^ _ ^ ;) ヽ

あー。弱ったな。

何らかの誤算があったとはいえ、全員を命の危機に陥らせたのは僕だ。怒られることがあっても、感謝されることはない。

だが、青髪は僕の言葉ごときじゃ止まらないのは身にもって知っている。
マロンさん

最終手段に助けを求めても微笑みながら手を振るだけだし。

ただ、まあ、しかし。

もし、代わりに一つ僕の願い事を聞いてくれるとするならば、

「ちゃんと僕の側にいてね？できる限りみんなを護るから」

(o _ _) b

こんな失態を晒した後じゃ、口だけの男としか見えないだろうけれど、それでも言っておきたかった。

「……わかりました、ご主人様」

o (^ _ ^) o

そっいつて僕の前にかしづく青髪。

うむ。これで一件落着…… うううう？

(。D。；；)

おかしい。何かが盛大に違うような気がする！
というか、呼び名がおかしいよ！

何この世界。アキバの平行世界か、日本文化の浸透率の見直しを行わないと僕の中の辻褄が合わないよね？！
とりあえず、まず、聴いておくべきことは――

「君はメイドという幻想か、それとも妻という脳内設定かつ！」

まずは、ドロドロの三角関係ゴールドロードになっ
ていないかを確認することだろう。
奴という心に決めた女性が
いる以上それは避けたいからねっ！
青髪は無表情なまま、少し小首を傾げる。

「……当然従者という立ち位置ですが？」

胸を撫で下ろす。どうやら、フル、っという面倒な行為をする必要はないらしい。

やっぱり、2人の人から異性として好かれている、と知っていて、
どちらかに絞っていたなら、そうしないと背信行為だと思っからね。
まあ、うちの経済状況をかえりみても、従者さんなんて雇う余裕ないけど。

そんな様子の見て、何故か少し膨れっ面（基本的に無表情だから
本当にしたかはわからない）になった後、俯きがちになり、頬を少し染めながら言葉をつなぐ。

「……もちろん、後者という意味でも構いませんが」

「却下」

「……側室も」

「辞してください」

(・・・)

ま、冗談なんだろうけどね。今はとにかくいっか。

面倒だし、ダルいし。四肢がジリジリ痛むし。何より、深く聞くと何かを失いそうだし。

体を起こす。腹筋が内出血したように痛む。

周りを見渡すと、昨日コボルドに襲われた水の流れ落ちる水場の近くだった。

……って、おい！

「移動するぞ」

こんなところにいたら何が起こるかわからない。危険だ。

足に力を入れて立ち上がる。一步踏み出し、

「うつ……」

鈍痛を感じてよろめき倒れる。

「回復魔法といっても万能じゃないの。だからボクの言う通りしっかり寝ていて」

「だが……」

「……さっき周りを調べましたが、おかしなことに生き物一匹の気配すらありませんでした」

「それなら逃げるべきだよ！」

生き物一匹いない、なんておかし過ぎる。だが、その理由にすぐに思いついた。

あ、あの狂ったモンスター共に殺されたのか、と。

だけど、確証は全くない。もし、他の要因が

「どちらにしろ、その傷では親友さんは動けないよ」

「……私達を心配して頂けるのは嬉しいことですが今は楽しいことを見つめましょう」

と思いかけて止めた。確かに多少歩けはするが、大して歩けないだろうし傷口が開いたりしたら大変だ。

じゃあ、

「親友さんを運べ、っていうのは無理、だからね？」

ならば、

「……怪我をしたばかりで五体不満足のご主人様を置いていけるとも？」

……ですよねー。

もう、いいや。諦めた。体を横に傾ける。こうなったら覚悟を決めてここで野営を行うしかない。

隠し玉も生き物一匹いないんじゃないじゃあ使いようがないしね。

栄養補給でもしよう。自分の荷物へ張うようにして行く。そして、携帯食料を取り出そうとして……

「あれ？」

コロコロと何かが転がり落ちてきた。

カップ麺だ。容器はプラスチック性の。確か山口県に向かう前にコンビニで買ったんだっけ。

丁度いい。保存食にも飽きてきたところだったんだ。

普段は水を大量に使うことは出来ないけれど、幸か不幸か今回の野営地は水場の側だし。

やかんを何故か今持っていたし。
水を入れ、タオルを濡らして取っ手をもつ。体に鞭を入れ、立ち上がり、薪の上にそれをかざす。

「……私がやります、ご主人様」

「うん。とりあえず、その呼び方はやめて」

あと、どうして僕は君にそういう風に呼ばれているのか疑問だよ。

「……主人の方が好みでしたか？」
マスター

「呼び方の問題じゃなくて立ち位置の問題なんだけど？」

「……ではなんと呼びしたらよろしいのでしょうか？」

（……）

聞いてねー。ま、いつか。

それにしても呼び名、か。あー。弱ったな。

あだ名を出すのは恥ずかしいし、普通に名前を言ったら様づけされそうだし。

名前、実は密かにコンプレックスだったりするからね。
分離すれば格好いいんだけど。

「普通に勇者とでも呼んで」

「……わかりません。ご主人様」

＼（ 〇 ）／

おお。会話の流れを普通に流れを無視しやがった。

「青髪。うちは、君を雇える余裕はないぞ」

いや。それ以前に元の世界に帰れる場所が場所だから帰れるかわからないけど。

水蒸気を吐くやかんの中を見る。

うん。

(・o・)

まだかな？

「……構いません」

「いや、構わない、って」

「……私は元々平穏と安静、及び生を求めてあの王様に使える気でした。しかし、あなたはそれを止めた」

(´・`・；)

「……だから、この髪の毛の先から、足の先。私の全てはあますことなく貴方のものです」

あくまで結果的にだし、自分で止まったんだけどね。要はその落とし前をつける、と。

うん。僕には荷が重過ぎる。

「マロンさん、助けて」

「ボクには無理」

本気で助けを求めるものの、にべもなくかわされお話にならない。

」(´・`・；)『……………＼(＾O＾)／

お。やかんの方はこれくらいでいいかな？カップ麺の蓋を開け、薬

味を入れ、お湯をかける。

「親友さん、それはなんですか？」

「カップラーメンというものだよ」

（「ー」）

マロンさんの言葉に返答しながら割り箸を割る。久しぶりの暖かい食事である。味わって食べよう。

思い、汁の中へ箸を伸ばす。そして、しっかりとかき混ぜる。

さて、いざ食べんとすると、マロンさんがジー、と上目遣いでこちらを見ていた。

「……………」

「え」と

「……………」

「あの〜？」

「……マスター主人。きつと欲しいのですよ」

んなもん言われなくてもわかってる。

問題は割り箸が一本しかないところだ。正直な話、このままでは間接キスと変わらないような感じになってしまう。

反対側で使い分ける、という手段もあるが汁物でやりたいとは思わない。垂れてくるから。

まあ、でもあんまり気にするのもあれか。

「食べる？」

尋ねると物凄い勢いで頷いて、控え目に口を開ける。

少し掬うと汁がたれないように補助しながら口元へ。

閉じられた目は開いた時とは比べ物にならないくらいに萎縮して、長い睫毛がフルフルと震えている。

フランクだから、あまり意識はしていないんだけどなんというか…

…顔は物凄く可愛いんだよな、この人。

「マスター……主人。私にも」

「はいはい」

（・・・）g

今更間接キスも何もないような気がしたので、青髪の元へノータイムで口元へ運ぶ。

なおこちらは無表情。マロンさんと同じく整い過ぎた節のある顔にはなんら変化はない。精々口を少し開いたくらいのことだ。

マロンさんと同じように青髪の口の中に入れ、自分がようやくありつこうとして——キラキラ、いや、ギラギラと目を光らす二人を見た。

「もつという？」

「はい！」

「……（コクン）」

（^ー^；）

薄目で口を少し開けて、もつと、もつと、と要求する二人。

恋人がするアーン、と似た感じだが、気分は親鳥。腹ペコな2羽の娘を抱えて大変だ。

結局、僕の腹にラーメンは一口もおさまらなかった。が、まあ、いいのではないのだろうか。

昔の奴と同じ笑みを救えた。その上、生き長らえた。

この事実だけで精神的にはお腹一杯なのだから、少し空腹でも我慢しよう。

腹はすけども、気分の軽い闘いの後であった。

二章後書き

僕「本名が未だに出てこないため、勇者でもないのに便宜上勇者と呼ばれ続ける僕と」

瑠奈（以下瑠）「私、こと月島瑠奈の」

二人『2章エンディングトーク!!』

作者・作者の兄（以下作・兄）『イエーイ!』

作「ようやく2章が終わったー!」

僕「まずは作者の発言からかよ!」

作「いやゝ大変だったんだよ? 改稿するの」

僕「知っているけどね」

作「茶髪さんのネームに一番時間がかかった」

兄「ああゝ。聞いてきたもんな。覚えやすい名前ないか、って」

僕「いや、それであのマロンとかいうセンスの欠片もない名前なの? 覚えやすいかも知れないけど」

作「それがさあ。兄貴と妹に各々聞いたのよ。そしたら、兄貴が茶色Ⅱ栗色だからチェストと」

兄「ああ、英語で栗はチェストナッツと呼ばれるからな」

作「妹からは可愛いからメロン、と」

僕「それは多分食べたかったんじゃないかな?」

作「もう面倒だからくっつけてメロンⅡチェストにしようと思った。でも、書いてすぐに」

メロン胸

作「……と和訳できることに気が付いた」

僕「……………」

兄「……………」

作「……………」

僕「いや、流石にこのプレイはないわ」

兄「ああ。自己紹介の度にメロン胸だと名乗るなんてな」

作「ね、問題があるだろ？ちなみに主人公の名前も出さないのは問題があるからさ」

僕「因みに何が問題なんだ」

作「版権的に」

兄「まさかの二次創作だったの?!」

作「いや、流石に嘘。というか存在感のないヒロインはどこ行ったんだ？」

僕「そう言えば、さつきから姿を見ないなあ」

瑠「親友君！見つけたぞ！」

僕「何をだよ」

瑠「私と親友君の出会いの話（という設定の話）をだ！」

中学二年の春。僕は森の中を一人で歩いていた。

瀬にはリュック。リュックの中には消毒液をはじめとした数々の医療品。

僕は子供の頃から不思議に動物に好かれる。そして、なつかれると例え畜生であろうと不思議と放っておけなくなってしまうのだ。

その日もたまたま森の中で見つけた大怪我をした熊の治療（とはいえ消毒しか知らない、ゴツコ遊びみたいなものであった）に向かう。その途中だった。

「……っ？」

森の中で不思議な瞬きに会ったのだ。当時から好奇心旺盛、無鉄砲な少年であった僕は気になり、思わず追いかけてしまう。

木々を駆け抜け、泉へと続く道なき道。

途中に散乱する段ボールにわずかばかり感じられる生活感。凶悪な罠に妨害しているとしか思えない物の配置。

それを通り越した先の泉に奴はいた。今より少し幼い発展途上な瑞々しい肢体をおしげなく披露し、サラサラの金髪をなびかせながら。

「……………っ！」

予想外の事態と眼福に思わず赤面して目を反らした。（横目に焼き付けてはいたが）

その気配と漏れる吐息にでも反応したのだろうか奴はこちらを見つめる。

——ヤバッ……………弁明……………

だけれども、どんなの弁明のしようがあるのだろうか。

固まっている僕の前に彼女はスタスタとやって来た。……………何も隠さずに。

ようやく謝るべきだと気が付いた時には奴が目の前にいて

「く、私ともあろう物が油断したか……………。貴様どこの工作員で、何をする気で……………。いや、まずは連絡手段を絶つべきか」

「……………あの……………」

「誰が喋っていいと言った！」

ちゅ、厨2病？とりあえず凄い剣幕で怒鳴られたので正座。腐葉土の上に全力で正座。

「まず貴様の所属は？！」

「いや、普通に中学校」

「中学校が何故私を……………っは、成る程私が問題児だから殺そうと」
「するかっ！」

「では、そこ以外のどこの所属だ！」

どうやら某空想病でも発病している模様。僕は奴を少し落ち着かせようと試みる。

（以下黒歴史的やりとりが続く）

僕「うゝん。僕って普通の子供という設定じゃなかった、け」

兄「コメントがしづらいな。色々と」

作「ま、まあ肉体的には平均的な日本人さ」

瑠「うむ。じゃあ、今回は私達の初めての性的な交わりを載せるぞ」

僕「やったことないよ！僕は潔白っ！」

作「この作品を18禁にする気か！」

兄「弟を殺させる気か！」

瑠「むむむう……ならば」

僕「おっと、時間だ。もうそろそろこのコーナー締めないと」

兄「コーナーとかあったの?!」

作「ああ。因みに今はフリー……」

兄「ラジオの番組みたいだね」

作「クトーク」

兄「フリークトーク?!」

作「お、時間だ」

僕・瑠『では』

兄「えええ！帰しちゃうの？」

作「ぶっちゃけ、自分合わせて3人のキャラを操りながら人と上手く会話するのは難易度が高過ぎる」

兄「言っちゃいけないよ！」

作「さて、次は告知コーナー」

兄「何を告知する必要があるんだよ」

作「次章で何をするかを」

兄「また何かを召喚する気なのか？」

作「いや。今回はお前に託す」

兄「無茶振りすぎるだろ！」

作「はい、台本この通りに読めばいい」

兄「次は、主人公の兄のターンです……ってこれだけ」

作「ああ。現段階の構想はな」

兄「一週間で次行けるのか？」

作「あー。実はその事なんだが、もうすぐ隔週になっちゃいそう」

兄「はあ？なにその宣言」

作「いや、年末年始で少し李いそがしいのと学業事情。あと、新しい作品“スベル・クラッシュヤー 碎術師の歩む道（仮）”を堤載する予定だから」

兄「連載？」

作「うん。学園チート物に……なるのかなあ？」

兄「何も言わんがその後はこれとお互いに隔週にしるよ」

作「はいはい。あ、あと緊急募集が一つあった」

兄「今度は何？」

作「この話の方向性としてハーレムがいいか、それとも一対一がいいか、それとも普通のラブコメ的に仕上げるのがいいのか意見が聞きたかったんだ」

兄「決めていなかったの？！」

作「どれでもいいから。俺はこの小説にこだわっているのはそんなところではない」

兄「だったらなんだよ」

作「刻一刻と変わる筋肉の様子を追いかけて続け、なるたけ少ない文字で数多の動きを表現する」

兄「ああ、バトルか？」

作「顔文字だ！」

兄「そんな奴が小説書いていていいの？！」

作「まあ、なんかグダグダな会話を繰り返してしまいましたが、これからよろしく願います」

0・英雄達の軌跡？

世界から見放された、誰にも報われない小さな女を救う。
そのためだけに勇者は手を差し伸べる。

本当は勇者には力はなかった。

才能はあったけれども、それを伸ばす気にはなれなかった。

自分、仲間、村、国、世界。それらを救う最低限の力と仲良くなる
うという意気さえあれば何でもできるのだから。

彼は守りたかった。目の前の無垢で何も知らない少女を。

彼は見せたかった。この世界の美しさ、醜さを。

何より彼は教えたかった。己の根本を支えている力——愛を。

「魔王よ、私の手を握れ。そして、ともに世界を見に行こう」

この日。人間界の全ての国では。

世界共通の敵——勇者という名の反逆者が指名手配されることになる。

『英雄伝——3章 孤独の魔王と最弱勇者』

ルーナ・ファンテーク・セード著より一部割愛

2・“神の御子”

——焰。灼熱の紅き光。人類に繁栄を約束した協力者に告ぐ。

範囲を限定。方向を設定。

——消せ

途端、辺りが肉が焦げる匂いで満ちる。

何をしているかというところ、この腐敗臭が不快なので、浄化しているのだ。

——大気。不変に属す空気。見えざる命の祝福者に願う。

範囲を設定。形状を球状に。術式は外界への影響を最小限にするにと。

——合わせろ

手から半円状の膜が出て、途中の物をすり抜けながら、限定した範囲に広がっていく。結界、という奴だ。

結界にも色々の種類が有るのだが、これは周りと少しずつ同化する効果を持っている。

つまり、匂いを外に漏れにくくしながらも、この辺り一帯を換気して、発散させている、と考えてくれればいい。

「……ほう。貴様……」

「それ以上はなしだ。それに、僕は関係ない」

目ざとく気付き、何かを言いかけた奴隷に釘を刺す。それは事実だが、出来れば否定したいことなのだ。

ついてこい、と手で合図をして、近くの広場へと向かう。その間、何度か後ろで不穏な動きを感じたが無視。

油断ではなく、これは余裕というものだ。

「貴様、名は？」

「セイイチだ。君は？」

「エル。では、セイイチ。幾つか問わせて貰おう」

おいおい。これが奴隷の態度かよ。思わず苦い笑いが溢れる。

腐葉土を掻き分け進む音が途絶えた。同時に僕も進むのをやめる。

ピリピリと感じる、殺気。懐へのびかかる右手の気配。

ゆっくりと、返す。

「なんだい？」

「……まず、貴様はやはり“神の御子”か？」

結局さっきの質問をオブラートに包んだだけだよね。そう考えて更に苦笑。

青汁を飲まされた感じだ。

それにしても、神とはね……おこがましいと僕は思っただけど。正解と言ったら正解だけど、間違いと言ったら間違えた。

無言の僕達の間風が疾る。

……このままじゃ納得してくれないか。

「ねえ、質問はそれだけ？」

「あと、2つ。何故私を助けたか、と、貴様、いや貴様らの狙いは

なんだ、ということだ」

……んー。困ったな。一つしか答えられないや。

すうつ、と息をすう。そして、吐く。

主人という権利を振りかざしてもいいのだけど、正式に契約した訳じゃないしなあ。

かと言って、答えないのも印象が悪いし。暴力も嫌だ。僕の方が強すぎるもん。

じゃあ――

「賭けをしないか？」

「賭けだと？」

「ああ、お前も僕の奴隷になることなんて納得していないだろう？だからその事も含めてな」

ルールは簡単。

1・僕が勝ったら奴隷として正式に契約し、僕が負けたら解放する。
2・戦闘中に一撃当てたら、1つ。怪我を負わせたら、2つ。地に体を臥せさせたら3つ質問に答える。

3・気絶、ギブアップ、戦闘不能で負けとみなす。また、得物は刃物を許可するが、弓・銃などの飛び道具は禁止する。

「森の中で半分とはいえ、エルフに喧嘩を売るとは……嘗めているのか？」

エルは不快感を露にしているが、不満はないらしい。
僕の実力を見過っているのか、自分の実力を見過っているのか。

ま、僕も相手を知らないから、お互い様か。

「で、得物は剣でいい？」

「ああ」

「重量は？」

「出来るだけ重く長い物」

ん、じゃあこれだな。宙に式を描いて刀と剣を取り出す。そして、後者を放る。

「……それはなんだ？」

「ユニーク固有技術」

ユニーク固有技術とは個々人が生まれつき持っている能力のことだ。遺伝的なものや、立場・境遇などが深く関わり、マインド・リリース“心解放”もその一種。少し柳眉がよせられる。しかし、エル、と名乗る少女はそれ以上は何も言わず、素振りを始めた。手に馴染ませているのだろう。剣捌きを見る限り結構できる。以外に掘り出し物かもしれない。僕も腰に帯刀をする。

「んじゃあ、10分後に」

3・“狂水”

空に一枚のコインが翔ぶ。陽光の反射を表裏交互に受けながら、それは舞う。

段々と上昇をした光り物はやがて下降する。決して抗えない“重力”という力に引き摺られて。そして、もう一度跳ねた。

「……はっ」

開始の合図。

それと同時に10mはあった距離が一気に詰められる。

剣は大上段。胸はがら空き。

そして、同時詠唱——“狂水”^{くるいみず}。

その名の通り、この攻撃は狂的だ。直線的な超高威力の水砲を打ち出す。

中級攻性魔法であるそれらが、いつの間にかエルの両肩に乗っていた。

というか、早いよ。コインが落ちる前から詠唱しないと無理だよね、それ。

だが——まだまだ！

三点同時攻撃を狙ったのであろうが、狂水を使ったのはまずい。威力は高いけど、打ち出したら方向転換が出来ない。

剣が出された後、少し遅れて魔法が発動する。

爪で刃を弾き、剣の刃を少し潰す。それから、潰された部分を摩擦

係数を0にした親指で受け止め、すぐに普段の数値の倍加を図る。

「くっ……馬鹿な！」

相手から見たら素手で怪我なく剣を受け止めたように見えたはずだ。でも、驚いていていいのかな？

強引に引いて、剣の平を左側の“狂水”の軌道上へ。盾として機能させる。

そして、水球は右足で蹴ることによって有無散消させる。

「じゃ、こっちの番だね」

右足を振り上げた状態のまま、左手にもった剣を更に後ろへとベクトルを向ける。急激に加わった力に対応しきれなかったのだろう。エルは前のめりに体勢を崩した。

その背に蹴り終えたばかりの濡れた右足がかかる。

「……………ッ！」

ようやく剣を放し、体勢を整えようとした時には、すでに丸腰で首を絞められている。

「と、まあこんな感じなんだけど。どうかな？」

「……………」

「刀も抜かせられない相手をこれ以上苛めたくないんだけど？」

「……………」

やはり無言で抵抗か。軽く首をしめていた少女を解放する。

少女は剣を拾うと、また斬りかかってきた。今度は払うような直線

的斬撃。技術よりも魔力によって強化された力で押すタイプか。先程と同じく左手の親指で受け止める。ただし、今度は体の後ろの方の場所を持つて。そのまま体を小さくして当て身へと移ろうとする。と、いつの間にか消えていた。

「エルフの森での強味は三次元的な戦いが出来ること！」

低級攻性魔法——“火炎”。

一瞬の間に木の枝に移っていたエルが火を放つ。

火炎が上から僕を呑まんとうねりくる。

切り替えの早さには感服していいな。

軽くないなし、構える。

「遅いつ！」

そんな僕に対して後ろ側から

中級攻性魔法——“散水”
シャワー

散弾のように水が飛び散り襲ってくる。

どうやら、後ろの枝に回り込まれたらしい。

立ち居で、水を斬り被弾を逃れる。

目で追ったところ、エルはすでに次の枝にうつって詠唱をしていた。

うん、早いね。悪くない。

魔法も、速さも、戦術も、魔力も。でも——

「無駄無駄無駄——！」

いくら土地に利があつたとしても、
どれだけ、魔法を使つたとしても、
どんなに、魔力を使つても。

その攻撃は僕には届かない。

だって、多分積み上げてきたものが違うのだから。

叩き落とし、回避して、潰し尽くす。拳を振るい、蹴りで穿ち、刀を抜き回す。

戦いの場に出た以上、男も女もない。でも、痩けた顔とお腹は狙わないし、傷もつけない。死なれても困るしね。

片や英雄として育てあげられてきた僕。血筋もサラブレッドと評してもよい。

傲慢だとは思うが、才能もあつた。

怪物や狂戦士とさえ現時点で言われている。
バケモノ バイサーク

例え、不良品だとわかつて、むしろ、余計に修行に打ち込んだ。

だが、もう片方は。もう片方には。

あれ以上の努力があつたのかどうか。ないのだろう。
なければ勝てない。

そして、その僕でさえ、勝てない。足元に及ばない。それが弟に負わせる重圧だ。

余裕の笑みは歪に歪み、失つた過去に関して懐古しながら。戦闘にしか意味を見出だせない己を嫌悪しつつ。

弟に負わせる楔の重さを再認識してる間も無情に時は、流れ行く。

4・“混ざり物”

さて、情けない報告からしうか。
一発もらった。遙か格下の相手から。

……いや、調子乗って生身で反射神経だけを使ってかわしていたら、
こうなってしまうました。

まあ、とにかく。それはおいておいて。
そんなこんなで、決着をつけ、渋る彼女に判を押させて契約成立。

今更ながら思うのだけれど、なんのためにこの娘は必要なだろう。

そうだ、そうだ。みすばらしかった。
ただそれだけの理由だ。

「で、一つ質問に答えて頂けるのですよね？」

ぎこちない敬語を使いながら尋ねてくるエル。断っておくと、別に
強要をしたわけではない。

それにしても……まあ、約束だからね。
ちよつと舌を出して、顔を歪める。

「どうぞ」

「何故私を救ったのですか？」

よかった。答えても問題がない質問だ。
さて、何でもすばらしい格好をしているだけで救いたくなったのだ
ろっか。

“混ざり者”の子は基本的に世間から疎まれる。そして、時には謂われのない誹謗中傷をされ、生け贄にされたり、村八分にされたりする。

それは僕も昔感じたことだ。誰にも愛されないことは本当に辛い。

だから、“家族”として彼女を愛してあげたいんだ。

「君を愛するため、かな」

「……………はあ？」

顔をしかめられ、距離をとられる。
ストレート過ぎたかな？

んー。それにしてもなんて答えればいいのだろう？ 惨めだから愛を与えたい、と言うのはそもそもにおいてアウト。

それを思っただけでもいいが、口に出すのは強要と同じだ。

じゃあ、事実を歪曲して——結局、僕はこの子の世話をしたいんだよね。

そして、直接そう言われて、お世話になるのはプライドが許さないだろうから、もっとオブラートに包んで、っと。

「じゃあ、子供が欲しいから？」

盛大にエルフは吹き出した。そして、子供扱いが気に入らなかったのか、逃げようとするので

——木。万物の根底に位置する王よ。かねてより盟約を結ぶ者が命

ずる。

対象を設定。

——捕らえよ！

「……きゃっ」

木の枝に巻かれ、可愛らしく悲鳴を挙げる半エルフ。

全く。奴隷契約したばかりで逃げるなよ。大人しくしていれば、何もしないのに。

まあ、錯乱状態なら仕方ない。申し訳ないけど縛ったままお昼ご飯の準備をさせていただこう。

「準備できるまでちょっと待ってね」

「け、獣おおー！」

おお。これは何とも嬉しい報せだ。

丁度肉が欲しいと思っていたんだ。肉食獣の肉は不味いがこの際構わない。

しかし、辺りを見渡しても兎一匹いない。あー。嘘か。やっぱり、まだあまり信用されてないのかなあ。

たださ——これは甘えの裏返しかも知れないな。

狼少年の嘘をつく理由も構ってもらいたかったからだ。“愛”を知らないこの子も無意識下で甘えている可能性も——

昼食の準備を始めようとする僕に“行かない”でというメッセージを発信しているのかも知れない。

相手が歩み寄ろうとこの発言をしている。そうに決まっているさ。

だとしたら、こちらからも相手に近付かないとな。気さくで大人な発言で返そう。

ほら、笑みを強くして。

「大丈夫。大丈夫だから」

「本当か？何もしないか？」

目の端に涙を浮かべながら、聞き返してくるエル。

「ああ。危害は加えないつもりだ」

「……信頼できん」

まあ、しょうがないよね。世間から否定された人間は、得てして世界からも拒絶されたと感じるものだ。

それを無理矢理直す。そんなことなんて“マインド・リリース心解放”でしか無理だし、第一この程度のことなら苦労はいらない。

でも、少しずつでいいから――

「初めは心が拒んだとしても、今から君の中に僕をうけいれてね」

「ぎゃああああ！た、助けてー！」

あれ？何故か一層怖がられた。

別に特に何もしないのになあ。まあ、僕は心中を暴露して軽くなつた方がいいか。

昼食の準備でもしよう。

放り出しておいたリュックサックから食パンとジャム、そして食器を取り出す。

バタバタ手足を振って暴れるエルフ。彼女に自分の世界から持ってきたパンと柚子のジャムを出して見せる。

動物を餌付ける時には餌をまず見せるのが効果的らしいからね。

「そ、それはなんだ！」

「これはパンって言うんだ。そして、これがジャム」

普通に返してちよつとつまる。

僕としては食べ物はおしゃべりを楽しみながら食べるべきだと思うんだよね。

確か、女性は誉めながら会話すると会話が弾んでよかったはず。

パンを一枚取り出して柚子のジャムを塗って渡そう。

きつと僕の誠意くらいは感じて落ち着いてくれるよね。

「ちよつと実演するね？この君みたいに白い部分に、ドロリとしたこの液体を塗る」

ゆつくりと、子供をあやすように笑顔を絶やさず。

一歩近付くと震えが強くなった。お腹空いているんだろつに、毒の心配でもしているのだろうか。

僕はそれをかじることによって安心させる。

「それから美味しくいただきます」

「ウニやややあ！いつそ殺してえええ！」

一層手足をバタバタさせて逃れようとする。反抗期、って奴かな？

もしくは、パン恐怖症？ジャム恐怖症？

とにかく、それなら美味しい物だということを示さないとな。

僕は、柚子の半透明のジャムを匙ですくい、エルの胸元へと近付ける。因みに少し浮いた位置にいたので、僕の身長ではそれが限界だ。拒否反応の勢いは変わらない。むしろ増した。

何故だ？

「ほらこのトロトロの物質が」

「いやあああああー！！」

「……うーん。でも、一度塗ってみてよ」

「助けてええええ！」

「生の方がいいの？」

「どちらもやめてええええ！」

親の苦勞がよくわかるなあ。

でも、頑張るぞ。そして、願わくはいつかお互いが愛せるような関係に！

とにかくこんな感じで僕は弟を優しく見守りながら、子供を作ったのであった。

丸

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4305u/>

彼女は僕に依存しすぎている。

2011年12月21日16時49分発行